

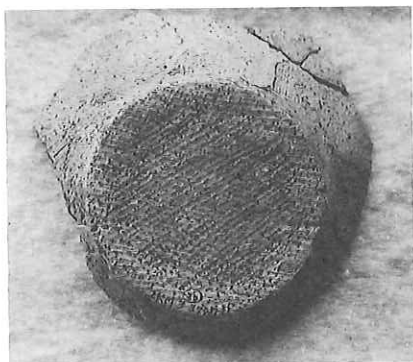
前史・考古編

総論

竹野町は、旧石器時代から縄文時代前期にかけて、^{はじかみ}椒字堂ノ上や、三原・城崎ゴルフ場のような高原状地形のところに、狩や採集にやってきた人々が生活をした痕跡を残している。やがて、海進の水が退いて陸化した竹野川沿岸には、縄文時代中期から人々が定住し、林にその跡を残し、松本の小森岡のような大集落を形成し、豊富な海の幸・山の幸を得て生活を営んだ。

弥生時代は、竹野湾に上陸した稲作文化が、早い速度で上流へ伝わり、小規模な水田から徐々に発展し、草弥生時代中期には、用水を配した大規模水田を経営するようになり、草飼・松本・阿金谷・轟・林・森本・小城・桑野本などにムラができ、それぞれ、住民を指揮する首長が発生したのであろう。

古墳時代に入っても、稲作を中心とした生産は拡大を続け、その経済力をもとに、各ムラの有力者たちは大規模な古墳を造り、それにならって、ムラ人たちも多くの古墳を造ったのである。風化した花崗岩の崖に横穴墓を造る人々もあった。また、この時代に、^{おじんだ}鬼神谷を中心に、須恵器を生産する技術集団も定住し、かなりの期間、その生産に当たったのである。



写1 縄文土器の網代底(松本小森岡出土)

昭和六十三年（一九八八）九月から調査をはじめた、須谷・阿金谷両地区にまたがる出持地遺跡からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての大規模な方形台状墓が検出された。

全国的にみても、経済成長にともなう開発によって、貴重な埋蔵文化財が発見され、原始・古代人の生活がかなり解明されてきたが、年間数万カ所に及ぶ開発によって、国民共有の文化遺産が破壊され消滅したという事実も忘れてはならない。

われわれの住む竹野町においては、調査の立遅れから、これまでの道路建設・圃場整備・用地造成などが、事前調査ぬきで行なわれたため、沖積平野部に存在したであろう埋蔵文化財のほとんどが消滅したのは惜しいことである。

本格的調査事例のすくない中でも黒曜石の出土数では但馬一を誇る椒の堂ノ上遺跡、縄文時代後期の遺物を無数に包含する松本の小森岡遺跡、明治三十五年（一九〇二）に但馬で一番早く発見された阿金谷横穴墓群、地方窯としては県下最古といわれ、現在調査中の鬼神谷窯跡、周囲に列石の残る方形台状墓の出持地など、重要な遺跡も知られており、未調査ではあるが、標高の高い高原状地形の地域は縄文以前の遺跡が、沖積平野周辺の山麓や尾根に、弥生墳墓と古墳が埋蔵されていることが推測される。このように、埋蔵文化財の宝庫ともいふべき竹野町であるから、今後も多くくの遺跡発見とその解明が期待される。

この編では、現在までに町内で発見された遺構や遺物などをもとに、但馬全体の所見を踏まえて、竹野町の原始・古代を考察してみた。

第一章 石器の使用された時代

第一節 原始時代の竹野

(1) 人類の発生

ヒトの進化は猿人にもっとも近い霊長類であるとされる千数百万年前のラマピテクスから始まり、次が、今を去る二〇〇万年から一五〇万年前に生存したとされる猿人で、その化石はアフリカ各地から発見されている。この時代の遺跡からは、生活跡とともに石器が確認されており、ヒトをヒトとして特色づける「道具」が、この時代に生み出されたのである。続いて、数十万年前に生活していたとされる、ジャワ原人や北京原人・ハイデルベルグ原人などが出現した。これら原人になると、直立性が一段と進み、脳容量の飛躍的増大、握斧のような定形化した石器の製作、火の使用などの特色をもっていた。

原人から、さらに進化した約十萬年前ごろの人類は、ネアンデルタール人など「旧人」と呼ばれている。この段階になると、一層今日の人類に近づき、屈葬や、死者への供花などの精神文化も発達し、石器製作も体系的になってき

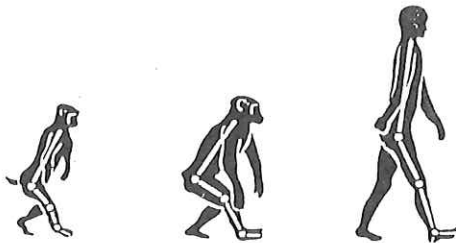


図8 ヒトへの道〔朝日百科〕

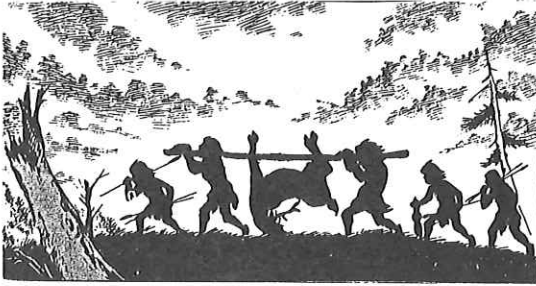


図9 旧石器時代のひとびと
 (『学習漫画日本の歴史』より)

た。日本では、愛知県豊橋市の牛川人^{うしかわ}がこの時期の人類であるとされている。今日の人類の成立を示すのが数万年前の「新人^{しんじん}」で、からだの形質的特徴は今日のわれわれと変わらず、文化的には洞窟^{どうくつ}壁画^{へきが}やヴィーナス彫刻を作り、石器も一定の目的に合わせた石器を規格性をもって製作するようになる。

約二百万年から、猿人・原人・旧人・新人と加速度的に進化したヒトは、その生息範囲も広がり、原人段階のある時期に、アジアの一半島であった日本にもその足跡がしるされ、旧人段階には、遺跡は増加するもの。まだまだ数えるほどである。しかし、新人段階になると三〇〇〇カ所を超える旧石器文化の遺跡が発見されている。

(2) 旧石器時代とは

ひとびとが狩と採集をしていた時代の中で、土器作りを知らない時代を無土器時代・先土器時代^{せんどき}・旧石器時代などと呼ぶが、どれも土器を持たない約一万年以上前の時代をさすことばである。

寒い気候

この時代はヴェルム氷期の後半で、地球は寒く、ヒマラヤ地方を中心とする最大規模の氷河が栄えた時代である。今から二万年前がもっとも寒く、気温は現在よりも七、八度も低く、海面も、今より一二〇〜一四〇メートル下がっていたとされている。したがって、日本列島は大陸と地続きで、この時期にナウマンゾウ・オオツノジカ・オオカミ・シカなどが大陸から入って

きた。さらに、最終氷期には北方からマンモス・ヘラジカ・ヒグマ・オオヤマネコなどが、南下してきたことが知られている。森林も、マツ・モミ・ツガ・トウヒなどの亜寒帯針葉樹や、広葉樹としては、ブナ・コナラ・クリなどが生育していた。旧石器時代人も、これらの大型動物を追って日本列島へやってきたのである。

(3) 但馬の旧石器と遺跡

日本列島において旧石器時代の石器は、礫石器・石刃・ナイフ形石器・細石刃・尖頭器と進化変遷してきたとされている。尖頭器を除いて、昭和四十五年（一九七〇）ごろまで、丹波・但馬・丹後・鳥取県などの日本海沿岸と内陸部には旧石器の出土する遺跡は発見されていなかった。ところが、同年、別宮家野遺跡からナイフ形石器四点が発見され、同五十九年（一九八四）には丹波の西紀町の板井遺跡と、春日町の七日市遺跡から、約二万二千年前に堆積したという始良火山灰の直上と直下の層から、数万点にのぼる各種旧石器と剥片が検出され、さらに、キャンプ跡を示す礫群遺構も発見され、但馬を含めて、兵庫県下一円に旧石器人が活動していたことが立証された。

同六十三年（一九八八）、美方郡温泉町の扇ノ山（二三〇九メートル）の山腹にある畑ヶ平高原から、縦長剥片を素材としたナイフ形石器・搔器・削器など十数点が出土し、また、その地続きにある海上の上山高原か

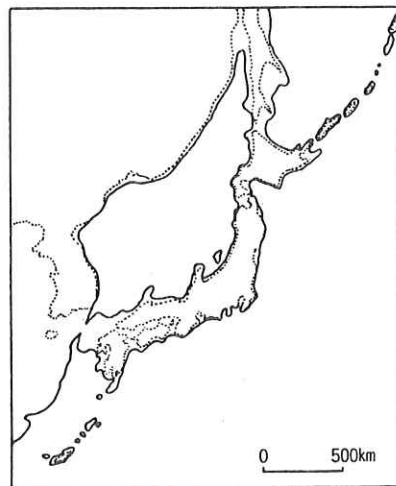


図10 2万年前の大陸と地続きの日本列島（『新しい日本の歴史』より）

ら横長剥片^{はくへん}を素材とし、瀬戸内式技法によって製作されたナイフ形石器一点が検出された。畑ヶ平高原出土のナイフ形石器は、岡山県苫田郡上斎原村の恩原遺跡^{おんはら}出土のものに似ているので、ほぼ同年代の二万五千年前の石器と推測される。出土地が標高一〇〇〇メートルあるというのは、西日本最高所の遺跡でもある。当時の畑ヶ平高原は、現在の標高二〇〇〇メートルの山頂にも匹敵する気温、森林限界を超えた草原で、草原にすむオオツノジカなどを追って狩猟にやってきた旧石器時代人が、しばらく滞在したものであろう。

同六十二年（一九八七）、養父郡八鹿町八木の圃場整備にともなう八木西宮・八木大山田両遺跡の調査で、旧石器に属すると思われる石器八点が出土し、中には火山灰層中から検出されたものもある。この八点の中には、瀬戸内系の横長剥片を素材とするものと、中国山地東部に類例をもつ縦

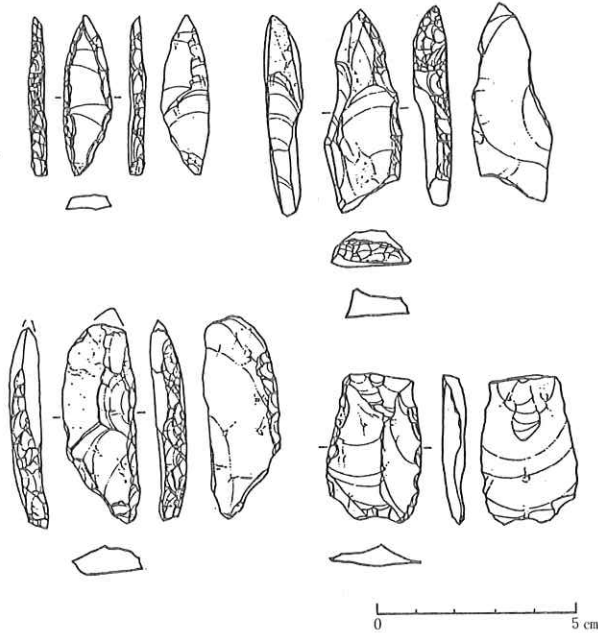


図11 温泉町の畑ヶ平遺跡出土のナイフ形石器

尖頭器は、投槍の先端部と考えられ、大型の動物を数人のグループで取り囲み、投槍で仕とめた狩の様子が想像される。但馬でよく知られているのは写真の三点である。1は関宮町の杉ヶ沢遺跡出土のもので、長さは八・九センチメートル・2は但東町の木村西ヶ奥出土のもので一〇・七センチメートル・3は養父町の森石ヶ堂出土のもので一二・四センチメートル、いずれも頁岩系の石を整形し、表裏ともにシカの骨などで押圧剝離して刃をつけてある。このうち、杉ヶ沢遺跡出土のもの、縄文時代初頭のネガティブな押型文土器の小片数

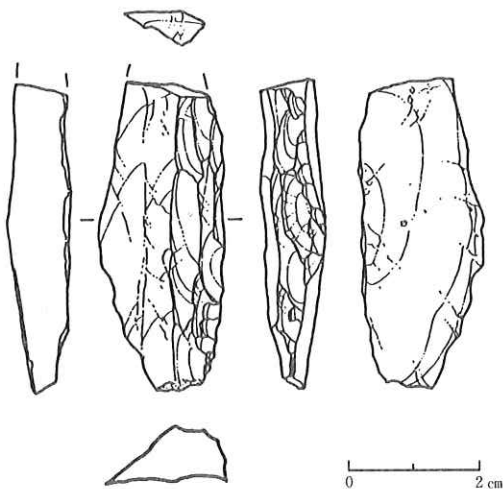
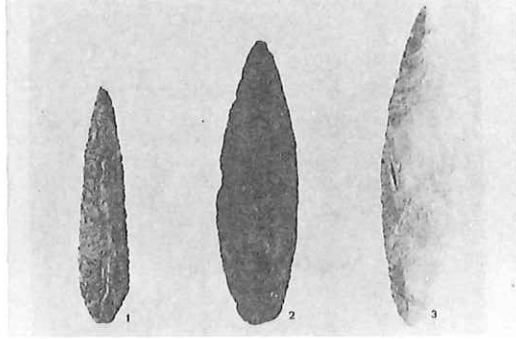


図12 海上上山高原出土ナイフ形石器

長剥片を素材とする石器が混在していた。

その他、養父郡関宮町の吉井円光寺林遺跡からは縦長剥片・盤状石核・横長ナイフ形石器が採集されており、同じく関宮町の三宅西谷遺跡からは、黒曜石を素材とした縦長のナイフ形石器一点が出土し、同じく関宮町の相地下向田遺跡からは翼状剥片を素材とした削器二点も出土している。

城崎郡日高町伊府遺跡からは、旧石器時代に属する局部磨製石斧が出土している。旧石器時代の終末期には細石刃といって、薄く剥ぎとった石刃を両側に溝を彫った骨や木に並べて植え、現在の鋸の刃のようにして使用したもので、東日本に多いが西日本には少ない。



写2 但馬出土の尖頭器
(『原始古代の但馬』3ページより)

1. 関宮町の杉ヶ沢遺跡
2. 但東町の木村西ヶ奥遺跡
3. 養父町の森石ヶ堂遺跡

金原・森本東方の台地・城崎ゴルフ場などや、可能性があることを指摘しておきたい。

堂ノ上遺跡から出土したサヌカイト製の石器は、先端部が折損しているが有舌尖頭器(石槍)である。残存部は五センチメートルであるが、完形るときは八〜九センチメートルはあったものであろう。断面は円に近いレンズ状であるが、表裏ともに押圧剝離調整がなされている。

(4) 竹野町の旧石器

竹野町では、尖頭器以外の旧石器は、現在までに出土していない。しかし、但馬各地の高原状地形や、洞窟・岩陰などから旧石器が逐次発見されているので、椒字堂ノ上・三原・川南谷・段・

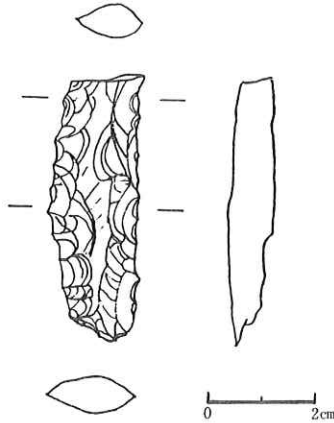


図13 椒堂ノ上出土の尖頭器基部

点と伴出している。したがって、これらの尖頭器は旧石器時代の末から、縄文時代の初頭まで使用されていたようである。

第一節 原始時代の竹野

図14 但馬の旧石器遺跡位置図 (1989年現在)

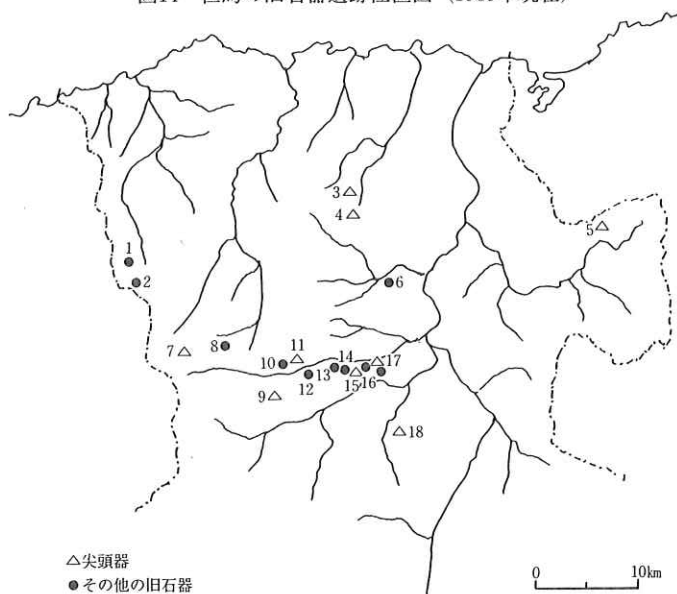


表13 但馬旧石器遺跡一覧表 (1989年現在)

番号	遺跡名	所在地	立地	備考
1	上山	美方郡温泉町海上上山	高原	横長剥片を素材としたナイフ形石器
2	畑ヶ平	岸田畑ヶ平	〃	縦長剥片を素材としたナイフ形石器ほか18点
3	椒堂ノ上	城崎郡竹野町椒堂ノ上	丘陵	有舌尖頭器基部 先端欠損
4	神鍋	日高町神鍋	〃	尖頭器2点
5	木村西ヶ奥	出石郡但東町木村西ヶ奥	小さい谷の岸	尖頭器完形品1922年採集
6	伊府	城崎郡日高町伊府	〃	局部磨製石斧
7	ハチ高原	養父郡関宮町丹戸横角	高原	尖頭器の先端部のみ
8	別宮家野	別宮家野	丘陵上	ナイフ形石器4点
9	杉ヶ沢	出合轟野	高原	尖頭器3点
10	吉井円光寺林	吉井奥山	丘陵地	ナイフ形石器、盤状石核、縦長剥片
11	吉井天井	吉井天井	〃	尖頭器の胴部破片
12	相地下向田	関宮下向田	扇状地	削器2点
13	三宅西谷	三宅西谷	山麓丘陵	黒曜石製縦長ナイフ形石器
14	三宅クサリ山	クサリ山	〃	礫器
15	三宅ハヤツメ	ハヤツメ	〃	小型尖頭器及び破片各1
16	八木西ノ宮	養父郡八鹿町八木西宮	〃	石刃状剥片2点剥片1、尖頭器1
17	八木大山田	八木大山田	〃	剥片石器、石核等5点
18	森石ヶ堂	養父町森石ヶ堂	丘陵の谷間	尖頭器 (但馬で最も大型)

現在、但馬で発見されている尖頭器は、破片も含めて一三点であるから、旧石器時代終末から縄文時代初頭にかけて、石槍を使用したひとびとがかなり多く生活していたことが推測されるときにも、堂ノ上遺跡で出土した意義は大きい。

第二節 縄文時代の竹野

(1) 縄文時代の但馬

縄文時代の特色は、土器と弓矢の発明である。とくに、土器は、食糧の貯蔵、煮たき、運搬、供物入れ、埋葬用の棺など、多くの目的で使用されたが、もつとも意味をもったのは、煮沸することによって食料の範囲がふえたことと、生のものを食べなくてもよくなった結果消化もよくなり、人々の寿命が延びたことである。それに加えて、世界的な温暖化現象で食料も得やすくなり、人口も爆発的に増加したようである。さらに、弓矢の発明は、鳥や動物の捕獲を容易にして蛋白質食料も増加したのである。

縄文時代は一万年近く続いたのであるから、土器の形や文様は、時代を鋭敏に反映して変化発展してきた。この土器の

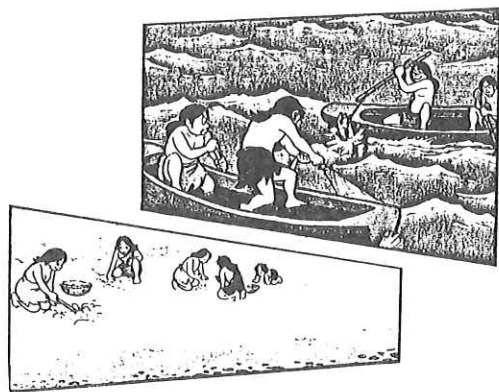


図15 縄文時代海辺のひとびとの生活
 (小森岡遺跡の想像図)
 学習漫画『日本の歴史』より

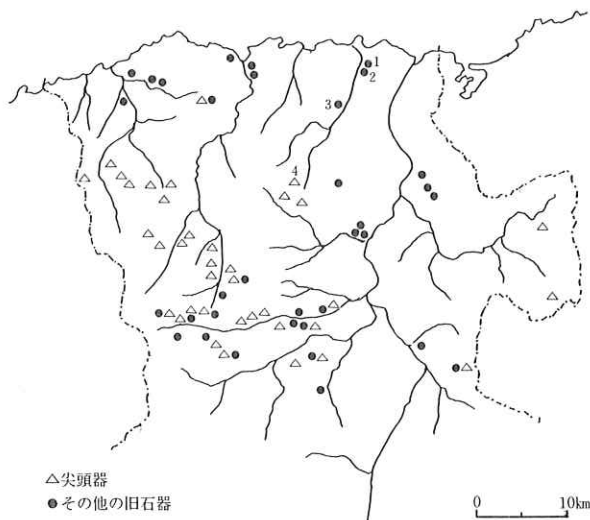


図16 但馬の縄文遺跡分布図

『原始古代の但馬』より改変

- | | |
|------------|-----------|
| 1 松本の土生谷遺跡 | 3 林の三味岡遺跡 |
| 2 松本の小森岡遺跡 | 4 椒の堂ノ上遺跡 |

変化を研究して、各地の編年図というものが作られ、早期・前期・中期・後期・晩期の五期に分け、近年は早期の前に草創期をおくようになってい

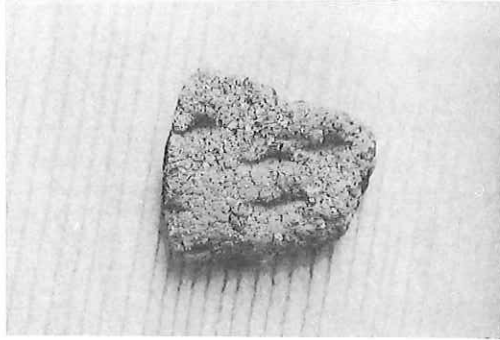
る。但馬には、草創期から晩期までの、各形式の土器がそろって出土しているので、人類が旧石器時代から途切れることなく住み続けてきたことが証明される。また、その分布は、多少の例外はあるが、早期・前期は高原

状地形の土地に、後期・晩期は河川の流域など、沖積平野部に遺跡が多いという傾向を示している。

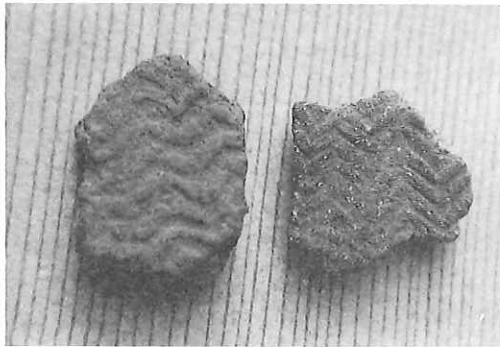
(2) 縄文時代草創期

日本でもっとも古い時代の土器は、隆線文・隆帯文・細隆線文土器と、爪形文土器と呼ばれる土器の一群で、これらの土器を草創期に入れているが、もっとも古い土器の放射性炭素による年代測定では一万二千年前という測定値が出たといわれている。

但馬においても、養父郡大屋町上山高原で、隆線文土器一点が出土している。続いて、養父郡関宮町の別宮家野遺跡からは、ネガティブな



写3 堂ノ上遺跡出土の爪形刺突文土器
（『堂ノ上遺跡報告書』より）

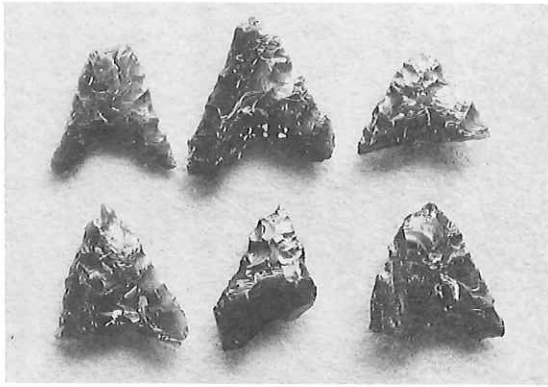


写4 堂ノ上遺跡山形文土器（同上）

押型文で特殊菱形文または、沈文と呼ばれる土器が主体となって出土し、兵庫県最古の縄文遺跡といわれている。これら、ネガティブな押型文を草創期に入れる場合もある。堂ノ上遺跡から出土した爪形刺突文の土器片は草創期の範疇に入るものであり、したがって、いつしよに採集された尖頭器は旧石器時代から縄文章創期まで、継続して使用されたと考えるべきであろう。

(3) 縄文時代早期

縄文時代早期の前半は、凸状の押型文を施した山形文・楕円文・格子目文土器が流行する。但馬でこの時期のものは日高町の神鍋遺跡・山ノ宮遺跡、関宮町の杉ヶ沢遺跡・ハチ高原遺跡・吉井円光寺林遺跡、八鹿町の八木西宮遺跡のほか美方町・温泉町・村岡町などの高原遺跡から多く出土している。早期後半になると、器面の表と裏に条痕を施した条痕文土器が出現する。植物の茎や、二枚貝の縁などで器面をこすって文様とするもので、土器形式としては滋賀県大



写5 堂ノ上遺跡の黒曜石製石鏃
（『堂ノ上遺跡報告書』より）

津市の石山貝塚を標式遺跡とするものである。

いっぽう、京都府の日本海岸、宮ノ下遺跡の下層から、外面に無節または単節の縄文を施し、内面を植物の茎による条痕で仕上げた平底の織維土器（宮ノ下Ⅰ式）と、内外面に単節縄文を施した尖底の織維土器（宮ノ下Ⅱ式）が出土し、日本海岸の特色をみせており、但馬各地にも条痕文と表裏縄文の土器が出土した遺跡は多い。美方郡美方町の広井上ノ山遺跡からはこの時期の住居跡四棟が検出されており、養父町の熊野遺跡、関

宮町の杉ヶ沢遺跡、日高町の神鍋遺跡などもそれである。竹野町でも堂ノ上遺跡の中心土器はこの時期のものである。

(4) 椒・堂ノ上遺跡

堂ノ上遺跡は床瀬と中村の西に展開する高原状地形で、標高は二八六～二八八メートルを測る。昭和二十三年（一九四八）ごろ開墾して桃の果樹園とし、次に桑園に切り替え、さらに同五十年（一九七五）ごろアスパラガスなどの菜園に造成した。

遺跡の発見は、同五十五年（一九八〇）に神鍋在住の和田長治氏が縄文土器片・黒曜石片・石鏃などを採集したことにはじまる。つづいて、日高町の一島昌志氏が多くの遺物を採集して、竹野町教育委員会へ提供したので、それを手懸りに同六十二年（一九八七）に確認調査を行なった。度重なる攪乱によって、遺構はほとんど破壊

されていたが、縄文時代草創期から前期末にかけての遺跡でその中心は早期後葉の条痕文や表裏縄文の時期であることが確認された。とくに、黒曜石の密度は但馬随一である。次の遺物が町教育委員会に保管されている。

土器片

爪形刺突文(縄文章創期)・山形文(早期前葉で古いもの)・山形文五点(早期前葉黄島式類似)
 ・押し引状沈線文(早期中葉手向山式類似)・絡縄圧痕文(早期)・縄文一六点(早期後葉)・
 表裏縄文六点(早期後葉宮ノ下式類似)・条痕文一三点(早期後葉宮ノ下式類似)・突帯爪形文二点(前期末
 大歳山式類似)・縄文四点(前期のもの)・その他文様不明のもの細片など。

石器

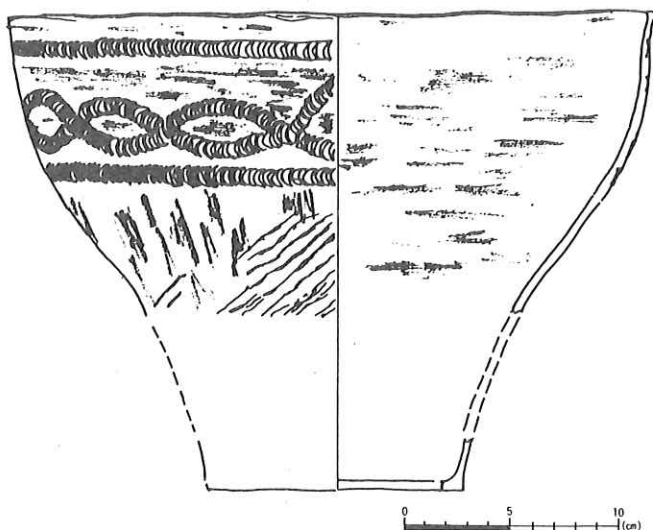
尖頭器基部(旧石器末もしくは縄文章創期)・黒曜石製石鏃・石核・剥片など百点以上。サヌ
 カイト製石鏃二点・サヌカイト製石鏃一点・削器四点・磨石三点・その他剥片一九点。とくに、
 約百平方メートルの地域から百点を超す黒曜石の石器と剥片が出土したことにより、黒曜石を素材とする石器
 の工房が存在したことが考えられる。この遺跡の黒曜石は、他の遺跡出土のものに比べて透明度が低かったの
 で、京都大学原子炉実験所へ資料を提出して分析した結果、但馬の他の遺跡の黒曜石と同じ隠岐ノ島久見原産
 の原石が使用されていることがはっきりした。

以上のように、堂ノ上遺跡は、神鍋高原から続く高原遺跡で、縄文章創期から前期末にいたるまで、何回も
 人々が生活した場所であるが、そのピークは、草期後葉で「宮ノ下式」に併行する時代であったと思われる。

(5) 縄文時代前期

前期の土器は、植物の茎などで表面を磨いた条痕文を残し、半截竹管による爪形文や、羽状縄文のもの、
 条痕を縄文に置き換える京都市の北白川小倉町遺跡を標式とする北白川下層式土器が出現する。また、瀬戸内

図17 但東町の後天神遺跡出土の爪形文土器（縄文時代前期）



の羽島下層式もこれに加わる。前期末には、突帯と爪形文を並べた神戸市の大歳山遺跡を標式とする大歳山式土器が現われる。椒の堂ノ上遺跡からも、この大歳山式土器二点が出土している。

北白川下層式の土器は、但馬では、日高町の神鍋遺跡・関宮町の八子高原第七地点・同じく吉井円光寺林遺跡・関宮町の西野遺跡・八鹿町の八木西宮遺跡から、かなりの量が出土している。但東町の後天神遺跡では、この北白川下層式の土器が遺跡の主体をなし、多くの爪形文土器が出土し、中には復元できたものもあった。また、この時期から決状耳飾が出現し、蝶形の異形石器もこの時代の土器に伴って出土する。

(6) 縄文時代の海進現象と竹野

縄文時代の早期後半から前期のはじめにかけ



写6 賀嶋公園遊歩道の波蝕跡

て、地球の気温が上昇し、極地の氷がとけて海面が上昇し、日本列島を取り巻く海岸線が陸地の内部へ侵入した。この現象を海進現象という。但馬でも、現在の標高一〇メートル以上の所まで海面が上昇したのである。

竹野町にも、海進現象の痕跡は多い。賀嶋公園の遊歩道の途中に波蝕跡を残す岩や、波蝕洞が数カ所あり、ジャジャ山公園の登り道にも波蝕跡がある。また、宇日の道路西南の崖面には、かつての海岸跡を示す円礫層がみられる。したがって、現在の耕地も集落も、轟付近までは水没し、支谷は入江になっていたものと推定される。そのため、これら平野部には縄文時代早期・前期の遺跡は存在しないものと思われる。

(7) 縄文時代中期

縄文時代を通じて、もっとも人口が増加し、遺跡の数も飛躍的に増大し、火炎土器のような創造性に富むものが作られたのがこの中期で、中部地方の高原にこの傾向が著しい。ところが、近畿地方では中期の遺跡はすくないとされていたが、関宮町の杉ヶ沢遺跡・外野柳遺跡・小路頃オノ木遺跡・相地上向田遺跡などから、岡山県倉敷市の船元貝塚を指標とする船元式土器、同じく船穂町の里木貝塚を指標とする里木式土器、また、京都府の平遺跡類似のものなどが多量に出土し、但馬にも中期の集落が存在したことが証明された。竹野町



写7 小森岡遺跡出土の中期の土器

においても、松本の小森岡遺跡から、船元式のほか中期の土器がかなり多量に出土している。

(8) 縄文時代後期

後期になると土器の器面に施文した縄文を部分的に消して、装飾化する磨り消し縄文の土器が使用される。この特色をもつ土器として、岡山県玉島市の中津貝塚なかつを指標とする中津式土器が出現する。この様式は近畿全域に分布しており、但馬の各地で出土している。岡山県の福田貝塚を指標とする福田Ⅱ式土器も、三本沈線でいろいろな文様が描かれており、これに、縁帯文土器が続くのである。

但馬では、豊岡市の中谷貝塚・荒原遺跡・円山川河床・女代神社遺跡など、平地に立地する遺跡と、日高町の神鍋遺跡・山ノ宮遺跡、関宮町の小路頃才ノ木遺跡・梨ヶ原向山遺跡、養父町の熊野遺跡くまのやなど、高野平式と命名され、但馬特有の土器である。後期前半の中期から後期前半の中期の中でも、浜坂町の池ヶ平遺跡いけがへら出土の太い沈線による渦巻き文土器は、池所に立地する遺跡もある。後期前半の中でも、

後期後半になると、元住吉山Ⅱ式もとすみしやまあるいは、宮滝式などが出現する。宮滝式の土器がまとまって出土しているのは、養父町の熊野遺跡である。竹野町松本の小森岡遺跡は、中期から後期前半の重要な遺跡である。

(9) 松本・小森岡遺跡

昭和三十五年（一九六〇）、松本公民館の建設に当たって、土地を造成したところ縄文土器が出土したという。同六十二年（一九八七）に遺跡の有無を確認するため、公民館の裏の荒地二メートル四方を試掘した。上層から中近世の陶磁器片が出土し、中層からは、平安・奈良・古墳時代・弥生時代後期の土器片が出土し、さらに、地表下〇・七メートル〜一・二メートルの下層からコンテナ一三杯の縄文土器と、コンテナ三杯の石器が出土した。



写8 小森岡出土中津式土器

出土した土器の時期は、中期前半
船元式・中期後半里木Ⅱ式・中期終
末型式・後期初頭中津式・福田KⅡ
式・後期前半の縁帯文土器にわたっ
ている。このうち、中期の土器は少
量で、後期の中津式が比較的まとま
って出土しているが、土器の主体を
なすのは、福田KⅡ式直後に位置づ
けられる縁帯文土器である。主体を

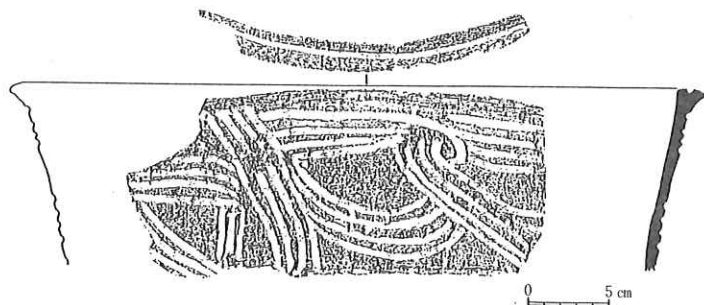


図18 縁帯文土器拓影



写9 小森岡出土福田KⅡ式底部

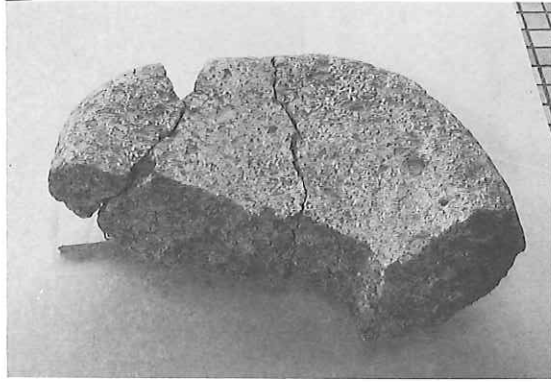
占める縁帯文土器の器種は、有文深鉢・有文浅鉢・無文深鉢・無文浅鉢で構成されている。

有文深鉢は、口縁部が肥厚し、頸部が強く外反して口縁部と胴部に文様帯を有するものや、頸部のくびれがゆるく、口縁・頸部・胴部に文様帯を有するものがある。口縁部は丁字状、あるいは、く字状に肥厚し、そこに、一・二本の沈線をめぐらせ、縄文を施しているものが多い。頸部が強く外反する深鉢には、口縁部あるいは、頸部から頸胴部の境に橋状把手を有するものもみられる。胴部の文様は、三〜四本を単位にした垂下沈線で曲線文様を描くものも多く、福田KⅡ式の胴部文様から変遷したものとしてとらえることができる。

無文深鉢は、頸部がややくびれるものが多く、「細密条痕調整」で仕上げているものが主体を占めている。この、「細密条痕調整」は、有文深鉢の頸部や胴部にも、縦方向に施されている場合が多い。この手法が分布しているのは、鳥取県東部から、小森岡、そして丹後に至るまでの日本海沿岸地帯である。

これらの土器は、編年的には福田KⅡ式の直後に位置づけられ、福田KⅡ式と従来の縁帯文土器との中間に位置する土器であって、縁帯文の成立について考察するために重要な資料である。

石器について



写10 小森岡出土大型石皿

小森岡遺跡で出土した石器は、わずか二メートル四方から出土したのに定型的な石器が四〇点もあり、しかも、多様な器種を含んでいる。ここでは、生業活動との関連の上で各器種を考えてみる。

狩猟用具としては石鏃一点が出土しているだけである。湧水による泥まみれの調査で、小さな石鏃を検出することは困難だったのである。またここでは、人為的に半截されたと思われる動物骨片（獣種・部位不明）も出土しており、狩猟活動が一定程度行なわれていたものと推定される。

植物質の採集、調理加工具では、打製石斧一点や、深く凹み、表面のすり減った大型石皿一点と、平盤石皿数点・敲き石・凹み石・磨り石が合わせて五点出土している。これらの石器の他に、包含層は湧水が多いことから、植物遺体そのものも遺存していることが期待される。

つぎに、漁撈活動に関わる石器の多いことがこの遺跡の特徴である。漁網錘として、切目石錘・打ち欠き石錘合わせて十点左右、他に有孔石錘も一点あり、さらに、浮子の可能性がある軽石も数点出土している。このように、多種類の石錘の安定した存在は、遺跡周辺に貝層があったという伝承と相まって、生業活動の中心が海であったことがうかがわれる。

加工具としては、伐採斧としての大型石斧の刃部一点、加工斧として定角式石斧が大小各一点ある。とくに

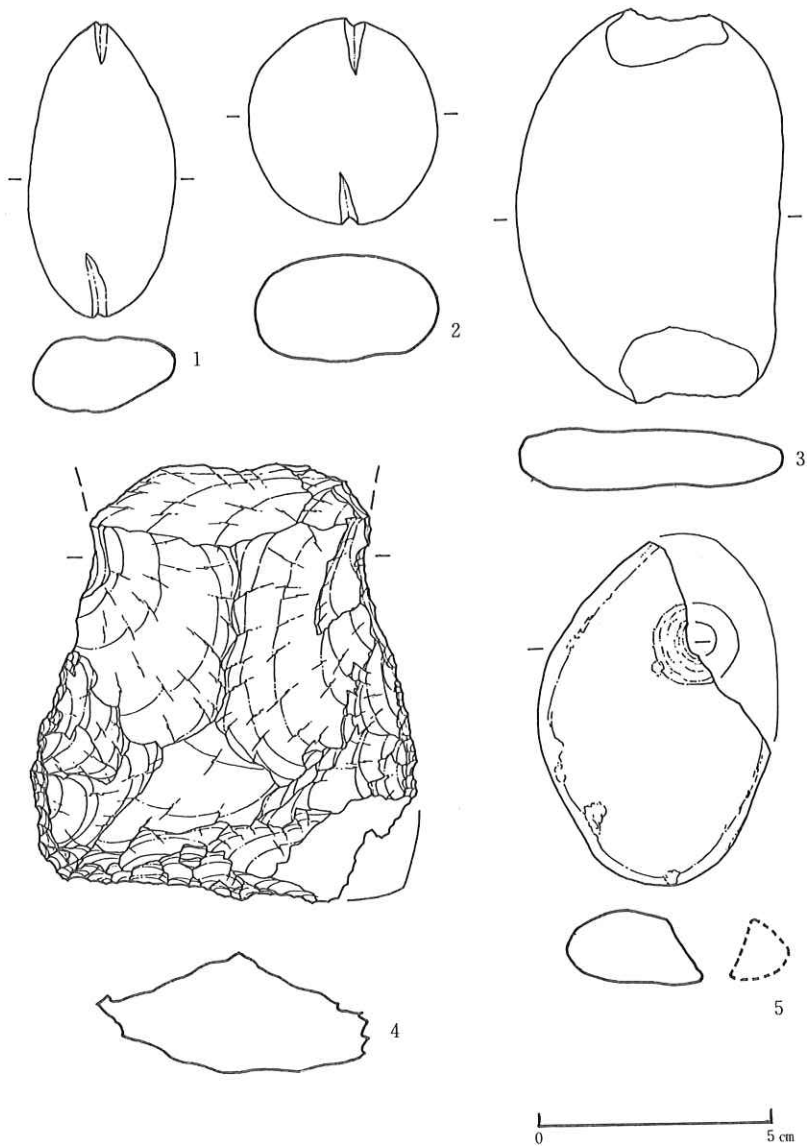


図19 小森岡出土の石器実測図
1・2 切目石錘、3 打ち欠き石錘、4. 打製石斧、5. 有孔石錘

小型品は、全長わずか二・七センチメートルであるが実用品である。このほか、砂岩・軽石製の砥石も数点みられる。

遺跡は、現在、海岸線から一・五キロメートルの内陸に位置し、標高は六メートル余りであるが、竹野川による沖積が進む以前は、遺跡付近まで海水が寄せ、入江の海岸であったものと思われる。

石製品は、玉と棒状品が各一点出土している。玉は、やや玉質のチャート素材とし、霰玉に似た、やや扁平な断面形をして、一部破損しているが、その破損面も再研磨している。棒状品は、管玉の未穿孔品とも考えられる。また、棒状品の素材に似た玉質の石片も多くみられ、ここで、玉の製作が行なわれていた可能性もある。

(10) 貝塚について

貝塚とは、古代人が食べ捨てた貝がらが厚く層をなして堆積したものである。つまり、一種のごみ捨て場である。したがって、貝がらのほかに、鳥獣・魚などの骨や、それらを加工した骨角器・土器・石器、ときに人骨が残っていることもある。

貝の種類や、他の動植物の遺体から、当時の気候、動植物相などを想定することができる。また、貝がらは、一度に捨てられたものではなく、順次に捨てられ、ときには土砂をかぶり、さらにその上に捨てられるというぐあいに、層序をなして形成されるから、それぞれの層から出土する遺物で時期を知ることができる。動物の骨や人骨などは、土中では残りにくい、貝塚では貝がらのカルシウム分の作用でよく保存されている。

全国的に約千九百カ所の貝塚があり、東京湾をはじめ、太平洋岸や瀬戸内海・有明海などに多いが、日本海

岸にはすくないといわれている。兵庫県では、高砂市に一カ所と、豊岡市に中谷なかたに・長谷ながたにの二カ所と合わせて三カ所の貝塚が知られているが、高砂市のものはすでに消滅している。

豊岡市の中谷貝塚

中谷貝塚は豊岡市の東南、田山川右岸の山麓の松井一雄氏宅の敷地内にあり、試掘調査による貝層の標高は六・五〇七・五メートルであった。大正二年（一九一三）に発見され、過去数回の試掘調査がなされている。昭和六十一年（一九八六）にかけて、豊岡市教育委員会の学術調査がなされ大きな成果があった。貝層の範囲は東西約十三メートル、南北はそれより長そうである。貝層はヤマトシジミを主体としたもので、数層が重なっており厚さは上層部（後期・晩期）は七〇〜八〇センチメートル、中層部は破碎状態の貝層で薄く、下層部は幅三メートル、中心部の厚さ五〇センチメートルのブロック状の貝層である。貝種はヤマトシジミが九八パーセント以上を占め、部分的にハマグリ・マガキの集まりがみられる。時期は、縄文時代中期中葉から晩期後葉ころまで断続的につづく遺跡である。

自然遺物として、

貝 イシガイ・オオタニシ・ヤマトシジミ・カワイイ・アサリ・マガキ・ハマグリ・ウミニナ・サルボオ・ハイガイ・オキシジミ・ナミマガシワ・ツメタガイ・アカニシ・テングニシなど。

魚骨 クロダイ・タイ・不明種

獣骨・歯 シカ・イノシシ・タヌキ・鹿角

植物 トチ・ドングリ・木炭

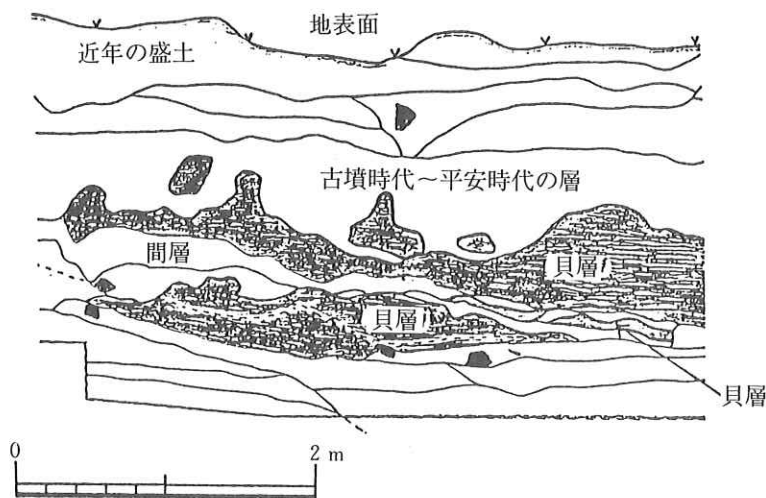


図20 豊岡市の中谷貝塚貝層模式図

小森岡遺跡は、中谷貝塚と標高・遺物の時期も同じくらいであり、小森岡に昭和十五年（一九四〇）に伝染病患者の屎尿処理の穴を掘ったとき貝層がみえたという人もあり、獣骨の出土と合わせて考えると貝層存在の可能性は高いといえる。

(11) 縄文時代晩期

縄文時代も終わりに近づく、亀ヶ岡式土器という、黒色の華麗な土器が東日本を中心に広く分布する。それに対して西日本では、縄文を施さない突帯土器が分布する。この土器は、口縁直下に突帯をはりつけたもので、深鉢形と浅鉢形土器が多く、但馬では、日高町の柵布ヶ森遺跡・焼ヶ辻遺跡・水上遺跡、養父町の野垣遺跡などがあり、これらの土器は弥生式土器といっしょに出る場合が多い。

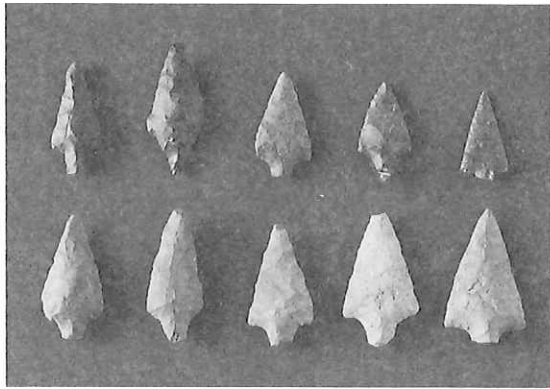
近年、縄文時代晩期の遺跡から、稲作を証明する器具や、籾跡の残る土器などが出土し、日本の稲作開始は、縄文時代晩期までさかのぼるとい説が強

器であろう。

松本・見蔵岡遺跡

同四十五年（一九七〇）ころ、縄文時代の遺物が採集されたというが、詳細は不明である。しかし、遺跡の位置が、小森岡遺跡と土生谷遺跡の中間に当たるから、縄文時代後期の土器か石

ものであろう。



写11 松本の小森岡第2地点出土の有茎石鏃（縄文晩期）

くなっている。竹野町では、小森岡遺跡の東四〇メートルの小森岡遺跡第二地点から、縄文晩期特有の有茎石鏃一〇点が採集されている。この有茎石鏃は、東日本に多い様式で、この様式が、日本海の海岸沿いに西へ波及したものと推測され、現在のところ、この遺跡が有茎石鏃の西限である。

(12) 竹野町その他の縄文遺跡

松本・土生谷遺跡 昭和五十五年（一九八〇）ころ、松本字土生谷に防火用水槽をつくるため、集落北の水田を掘り下げたところ、

地表下二メートル以上の深い層から、縄文時代の土器片二点と、弥生時代終末から古墳時代へかけての土器片数点、磨製石斧の刃部一点が出土した。土器は、小森岡遺跡のものと胎土が似ているから、縄文時代後期のものであろう。磨製石斧は、形状からみて、弥生時代の

林・三味ケ
岡遺跡
林集落の北端に、舌状尾根が竹野川へ向けて突出している。この尾根を三味ケ岡と呼ぶ。古くからの墓地で、三味ケ岡と

言っていたのが訛ったものである。

この尾根上に直径一五メートル余りの古墳があったと伝えられるが、現在は跡かたもない。現在は畑地になっており、この畑から、昭和六十年（一九八五）に須恵器・土器片を多量に採集したが、同時に、石器の素材とおもわれる石英片や、紅色チャートなどを数点発見した。同六十三年（一九八八）秋、旧道の改修工事の現場から、土師器・須恵器に混って、縄文時代後期のもものとみられる土器片数点と、サヌカイトの剥片一点を採集した。この舌状台地は縄文時代から平安時代へかけての複合遺跡である。

神原遺跡

森本字神原の集落内の畑から、石鏃と土器片が出土したというが詳細は不明である。

神原出土の石棒

竹野町歴史年表によれば「昭和五十二年に神原の川原で石棒二本発見」とあり、現在、石棒は森本地区公民館に展示

してある。長さは、二本ともに五六センチメートル、直径は一六センチメートルと、一四センチメートルで、風化が進み先端が欠けている。もともと、縄文時代の石棒は、男性器を模したものが普通であるが、この石は、亀頭部のない無頭石棒である。

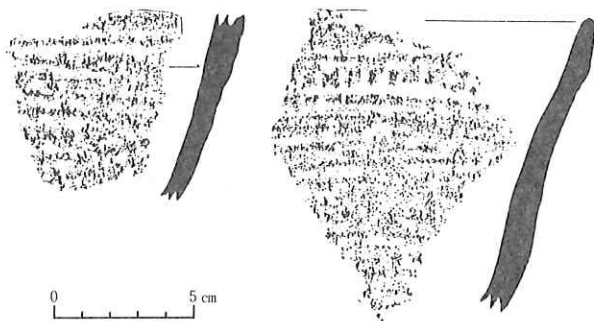
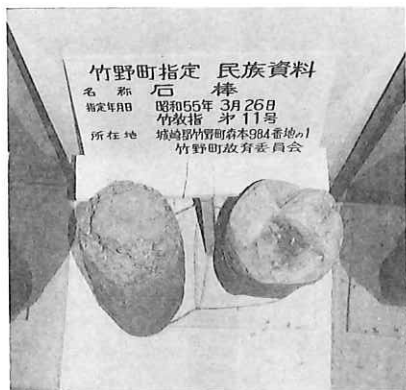


図21 松本の土生谷遺跡出土の縄文土器拓影



写12 神原出土の石棒

(13) 縄文人のくらし

高原のくらし これまで、但馬で調査された縄文遺跡の調査結果をもとに、当時の人々の生活を推測してみることができ、と、まず、早期・前期・中期には、丘陵状の高原に住む場合が多く、三〜七軒の住居で一〇人

〜三〇人以内の集団で生活していたようである。草創期から早期にかけては平地式住居（掘立小屋）を建てていたが、早期末には皿状に掘凹め、前期のころから竪穴式住居を構えるようになったものであろう。

住居は、直径四〜六メートル、丸太の柱を建て、それに笹や茅などで円錐形の屋根を葺いた粗末な小屋で、小屋の中には枯草などを敷いていた。また、草で編んだ敷物を敷いた場合もあったであろう。この敷物は、屋外で食事する時も使ったであろうし、夏の陽よけにしたこともあろう。高原の早期遺跡から出土する石鍾は、

この石棒に似た石は、竹野町の方々にある。林の大部家の敷地にあるものは、自然石ながら形は男性器に似ている。圃場整備工事で移転したが、松本・羽入の山の神さんの二本の石棒は最近まで礼拝行事を伴っていた。桑野本の稲蔵古墳の墳丘上にまつられた攝社の石段の左右に一本ずつ倒れており、御又のあたご社のある長井谷古墳のそばに一本、十二所神社の参道数力所にある石棒には、最近まで供物の献じられた形跡がある。

つまり、竹野町では、近年まで、石棒信仰が伝承されていた地域であるから、神原出土の石棒は縄文時代の遺物でないのかもしれない。

編物用具と考えられる。

衣類は、植物の繊維で編んだ着物や、動物の毛皮などを身に着け、これらの衣類は、鹿の角や骨から作った針で縫い合わせたのであろう。装身具として、ペンダントや曲玉まがたま・管玉くだたまを首や胸にかけ、玦状けつじょう耳飾りもつけていたであろう。環状の土製品や石製品も出土しているので、腕輪か足輪もはめていたのであろう。

生業の中心は、食糧の採集であったから、ワラビ・ゼンマイ・フキ・セリ・ミツバ・ヒルなどの草の芽や、タラ・リョウブなどの木の芽や葉、ワラビ・クズ・ユリ・ヤマイモなど草木の根、ヤマナシ・ヤマブドウ・ヤマガキ・グミ・ヤマイチゴなどの果物も補給したであろうが、主食は、トチ・クルミ・クリ・シイ・ブナの実、各種ドングリなど堅果類であったようである。それは、但馬の高原遺跡からは多量の石皿・敲たたき石・凹み石が出土することでも想定される。トチやドングリの苦味にがみも、煮沸したり、水にさらしたりしてアクをぬき、潰して練って、団子やもちのようにして食べたものであろう。

狩猟では、弓矢を使って、イノシシ・シカ・ウサギ・タヌキ・ムジナ（アナグマ）・テン・イタチ・ネズミ・モグラ・リスなどの獣類や、ヤマドリ・キジ・キジバト・ツグミ・スズメなどの鳥類も、栄養価が高くておいしい蛋白源とし



図22 縄文人の暮らし



写13 小森岡遺跡出土の切り目石錘

て、集団的に、また個人的に捕獲したものであるが、現代人が考えるほど多量には捕獲していなかったといわれている。縄文人の遺骨に含まれる脂肪酸を分析した結果、植物質食料と動物質食料の摂取量の割合は、現代人と同じくらいであったようだ。また、獲物の量も生物サイクルのバランスからみて、現在とあまり変わらなかったであろう。

海辺のくらし

福井県美浜町の鳥浜貝塚の調査が進むにつれて、縄文時代の人々が想像以上の文化生活をしてきたことが実証されてきた。小森岡遺跡の調査結果も、このことを裏づけてくれた。前に述べた、山の幸の採集のほかに、海と竹野川から、釣針・もり・網などで多くの魚や貝や海藻など海の幸を得て、大きな集落を形成していたのである。

当時の人々は、船の扱いも上手で、漁獲の技術や道具も現代人が使っているものの祖形はほとんど出尽しているといわれているので、クジラなどの大型海獣から、竹野川の小魚にいたるまでの多くの魚を獲ったことが考えられる。山の鳥獣と違い、当時は魚も貝も海獣も現在と比べものにならないほど多かったのである。竹野川にもサケやマスが川面を埋めてのぼったことであろう。

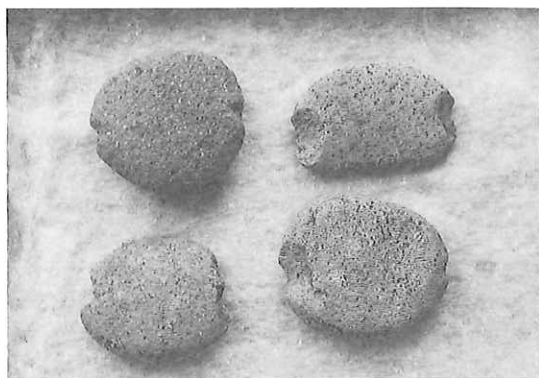
しかし、自然の脅威におびえながらくらす縄文人には自然に順応するため、生業の中にも生活の中にも多くの禁忌が定められ、この禁忌

で集団や個人を律していたのであるが、獲物は集団内で公平に分配され、貧富の差や権力的な支配者もなかったのである。

交 易

約七千年前といわれる堂ノ上遺跡から百点を超す黒曜石の石器と剝片が出土しているが、その石材は島根県の隠岐島から運ばれてきたものである。小森岡遺跡でも黒曜石が出土しているが、小森岡の場合、多くの石器と剝片が四国香川県の金山産のものである。

石器の石材だけみても、このように広い物資の交易が証明されている。腐敗して消滅した海の幸・山の幸などの食料や土器・道具類などもかなり大がかりな交易が行なわれていたであろうし、小森岡遺跡は物資の集散地であったのではなからうか。



写14 小森岡出土の打ち欠き石錘

第二章 金属器伝来以後

第一節 弥生時代の竹野

(1) 稲作の伝来

弥生時代とは、弥生式土器時代を略した呼び方で、年代は、紀元前三〇〇年から、紀元後三〇〇年にわたる期間をいうが、その上限は縄文時代の晩期と重複し、下限は古墳時代に重なり、地域差もありはつきりしない。

この時代の特色は、水田で稲作を中心とする農業が起り、それと同時に、鉄器が大陸から伝えられて金属器時代に入った。青銅器は、すこし遅れて弥生時代中期になって宝器の形で移入されたようである。また、縄文時代には不明であった機織はたがの技術が、この時代からは存在がはつきりしてくる。

日本人が米を常食とすることは、この弥生時代に決定づけられた。弥生式土器といっしょに炭化した籾もみが殻が出土したり、土器の表面に

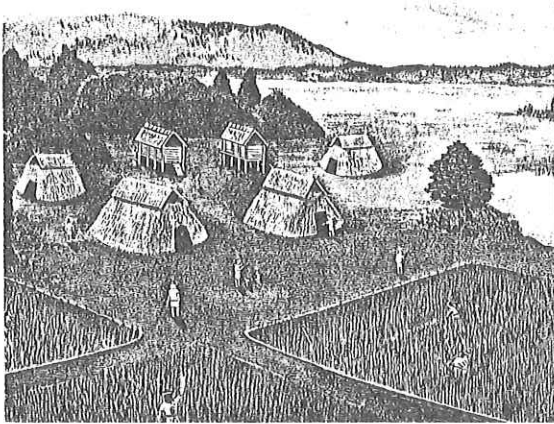


図23 弥生時代の村の風景（漫画『日本の歴史』より）

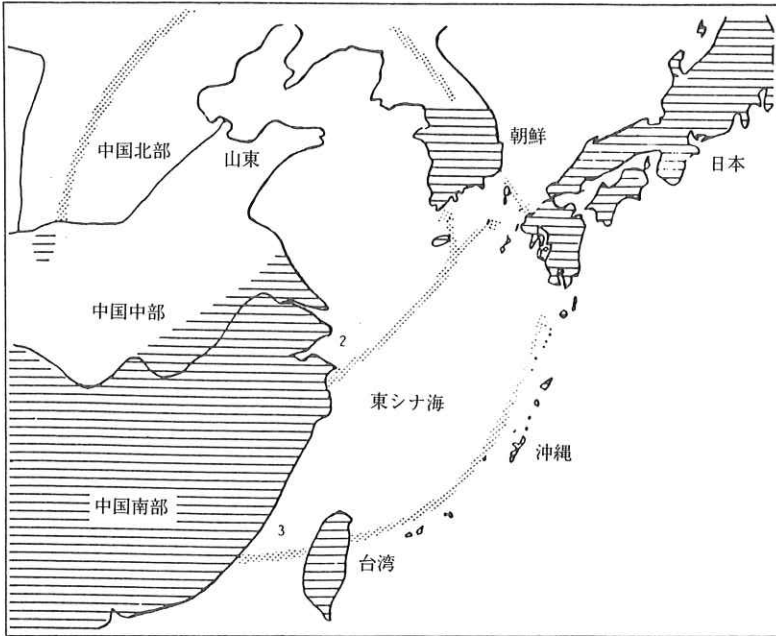


図24 稲作の伝来（『原始古代の但馬』より）

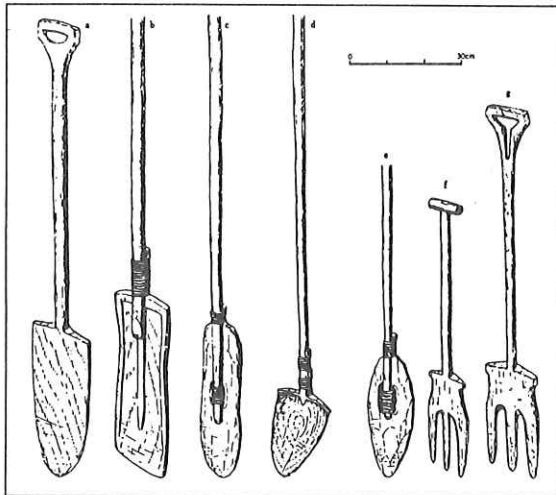
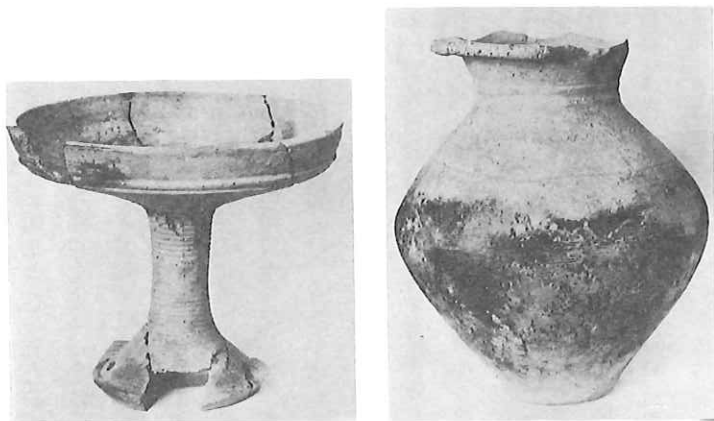


図25 弥生時代の木製農具（『原始古代の但馬』より）



写15 養父町のササ遺跡出土弥生式土器（『原始古代の但馬』より）

粳跡もちもちのみられるものもある。また、鋳くわ・鋤すま・田下駄たげた・臼うす・杵きね・田舟たねぶねなどの木製農具や、稲の穂を摘みとる石庖丁いしぼうちやう・石鎌いしり・水田跡なども各地で発見されている。この、稲作のほかにマメ・マクワウリ・ムギ・アワ・ソバなどの畑作も行なわれていた痕跡がある。稲作は、縄文時代晩期に伝わったとされ、その経路は、1・朝鮮半島経由、2・中国から直接、3・台湾から琉球列島伝いにと三説あるが、最近の研究によると、中国・朝鮮では長粒の稲「インディカ」ばかり出土して、短粒の稲「ジャポニカ」は出土しないという。それに対して、台湾や琉球では、かなり古い遺跡から「ジャポニカ」ばかり出土するので、第3の経路が重視されてきつつある。

(2) 弥生文化の波及

弥生式土器は、赤褐色の簡素な土器で、その変遷にしたがって、前期（紀元前三〇〇年～紀元前一〇〇年ころ）、中期（紀元前一〇〇年～紀元後一〇〇年まで）、後期（紀元後一〇〇年～紀元三〇〇年）の三期に分ける。畿内では、さらに、前期を第I様式、中期を第II・第III・第IV様式、後期を第V様式としている。

弥生式土器は壺・甕・鉢の三種がセットで使用された。壺はおもに貯蔵用、甕は煮炊きに、鉢は盛り付けに、用途に応じた器形が作られたのである。後になると、高杯や器台など、供えものをする土器が現われる。九州に上陸した稲作文化は、その土器を伴いながら瀬戸内海を経て、畿内・伊勢湾へと東進したコースと、日本海を東進して、出雲・因幡・但馬・丹後へ上陸したコースとがあった。

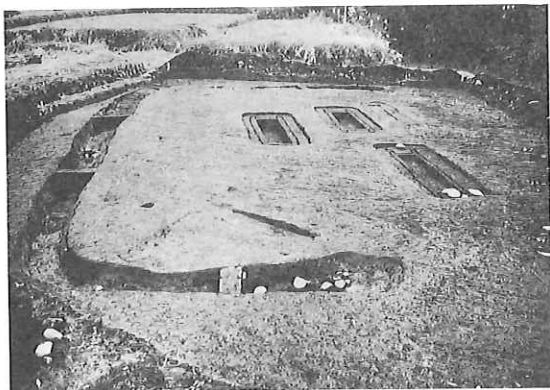
円山川をさかのぼった豊岡市の駄坂川原遺跡・出石町宮内付近・八鹿町の小山東家ノ上遺跡などで前期の土器がまとまって出土しており、その他、円山川の支流八木川や大屋川の流域でも少量ずつ出土している。したがって、竹野川の河口から入って、その沿岸に上陸した人々もいたことが推測される。

弥生時代の初期には、石器が多く使用されていたが、やがて、金属器が普及したので石器は衰退してしまう。鉄器は、土中に入れば腐蝕してしまうので出土例が少ないが、当時の木器には、鉄器による加工痕が残っている。青銅器は、中期に多く使用され、剣・鉾・鏃・鏡・銅鐸・釧・巴形銅器・鍬先・鋤先などがある。

銅鐸は国産で、祭器・宝器として用いられたようであるが、ある時期に一括埋納された形跡があってもその理由は不明である。但馬でも、大正元年（一九二二）豊岡市気比の鷲崎で銅鐸四個が発見された。また、日高町の久田谷では、故意に破碎されたと思われる銅鐸の破片が出土し、その謎を深めている。



写16 豊岡市気比の銅鐸
（『原始古代の但馬』より）



写17 八鹿町の大山田方形周溝墓

(3) 竹野町の弥生遺跡

野の一部に住みついた人々が耕地を拡張し、人口も増加し、集落の数もふえたのであろう。弥生時代の遺跡は水田の下に埋まっている場合が多い。竹野町では、最初に述べたが、圃場整備工事によって、水田の下に存在したであろう弥生遺構と遺物は、ほとんど発見されることなく消滅したものとおもわれる。

弥生時代の集落は、水田に近接する土地に形成され、住居は竪穴住居で、直経または一辺五〜六メートル、深さ五〇〜六〇センチメートル、中央に炉を設け、屋根は地面にまで葺いていた。このような住居十数軒で集落を形成している例が多い。百軒を超す大集落や、濠に囲まれた環濠集落、高い丘の上に防御施設をもった高地性集落などもある。

墓制は、方形周溝墓・円形周溝墓・方形台状墓と変遷し、埋葬は、組み合せ箱式石棺・甕棺・支石墓・石蓋土壙・無蓋土壙などがある。出持地遺跡の方形台状墓は、弥生時代終末から古墳時代初頭の様式である。

但馬では、弥生時代中期になると遺跡の数は爆発的に増加する。とくに、IV様式の土器の出土するところが多い。つまり、前期に沖積平



写18 土生谷遺跡出土
磨製石斧刃部

近くの民家を改修したとき、石庖丁が出土したというが、はつきりしない。
 松本・土生谷遺跡 松本集落の防火用水槽を掘った際に、縄文土器とともに弥生時代終末の土器片数点と、磨製石斧の刃部が一点出土した。

椒・中村遺跡

昭和五十五年（一九八〇）ころ、中村の圃場整備工事中に発見された第IV様式の壺の口縁部が一点あり、小学校に保管し

椒・堂ノ上遺跡

昭和六十二年（一九八七）、縄文遺跡から五〇メートルほど離れた畑から、弥生時代のものとおもわれる土器片数点を採集した。養父町熊野の高原でも、弥生時代IV様式の土器片数点が出土したが、標高二八メートルの高原で、雑穀の栽培が行なわれていたもので、堂ノ上も同じように、雑穀栽培が行なわれていたものであろう。

松本・小森岡遺跡 小森岡遺跡の縄文土器包含層の上層から、第IV・第V

様式とみられる底部・口縁部・櫛描文などの破片が二五点ほど出土した。
 鬼神谷窯跡

平成元年（一九八九）七月から行なわれた、第二次鬼神谷窯跡の調査中、六世紀の住居跡から、弥生時代の磨製石斧の刃部一点が検出された。鬼神谷にも弥生時代に人が住んでいた。

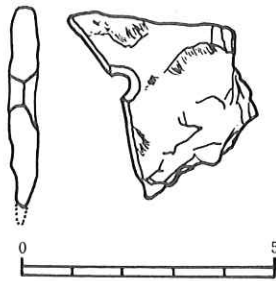


図27 八鹿町小山石庖丁

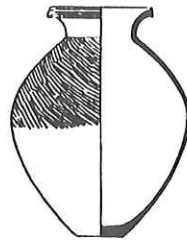


図26 椒中村出土の壺の
模式図

出持地遺跡

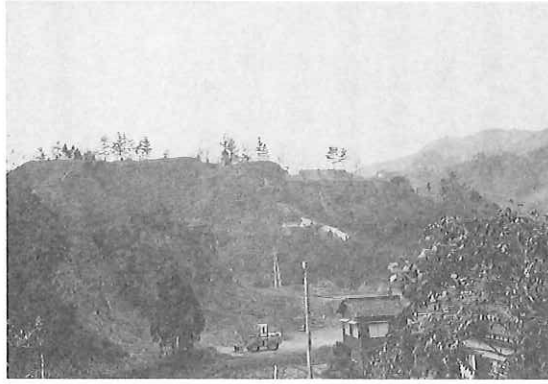
昭和六十三年（一九八八）秋から発掘調査した出持地の方形台状墓は、弥生時代終末期の様式であり、一四基ある主体部のうち、数基は、弥生時代の範疇に入るものであろう。とくに、1 A1・1 A10の墓壙内から出土した細い管玉などは弥生時代のものである（図28）。

このほかにも、竹野川の兩岸の山麓の丘には方形台状墓の可能性のある削平地が点在している。おそらく、弥生時代前期に竹野川沿岸に住みついた弥生人は、数百年の間に耕地を拡大して生産を高め、但馬の他の地域と同じように人口もふえ、幾つかの中心集落が形成され、それらの首長一族を埋葬するために大規模な方形台状墓を造成したものと思われる。

第二節 竹野町の古墳時代

(1) 古墳時代とは

古墳とは、高塚をなす古代の墓という意味で、三世紀の終わりごろから七世紀の後半まで築かれ、大きい盛土、または、石積みによって造られ、内部に遺骸を収める施設を伴い、副葬品のみられるのが普通である。古墳の存続した時代は、古墳以外に資料が乏しいので、この四百年間を古墳時代といい、盛り土はなくとも、この時代の墳墓のすべても古墳とみなすようになっていいる。この四百年間に、古墳の質は大きく変化している。この変化によって、古墳時代を前期と後期に分ける考え方と、四世紀を前期、五世紀を中期、六世紀と七世紀を後期と三期に分けて考える場合がある。竹野町で、これまで確認されている古墳は七五基であるが、今回の踏査で一五〇基に達していることが分かった。しかし、調査によって時期のわかるものは一部に過ぎないため、



写19 出持地方形台状墓遠望

いどの墓を造る段階。

5、ほぼ同時期に、方形に墓を削り出して形を整える段階が、継続的、あるいは断続的に出現している。(『きらびやかな黄泉の国』5頁より引用)

出持地

昭和六十三年(一九八八)九月から調査を始めた出持地遺跡は、竹野川の河口に近い右岸にあ

方形台状墓

って、いもじもとしとかけ 鋳物師辰峠より北西にのびる尾根上に位置し、標高は四一〜五〇メートルを測る。竹

各古墳を、前・中・後の三期に分けることはむずかしい。したがって、但馬の傾向の中で考えてみたいと思う。

(2) 弥生時代の墳墓から古墳へ

近年、但馬では弥生墳墓から、初期の古墳の発掘が相つぎ、弥生の墳墓から古墳へと変遷するプロセスがわかってきた。

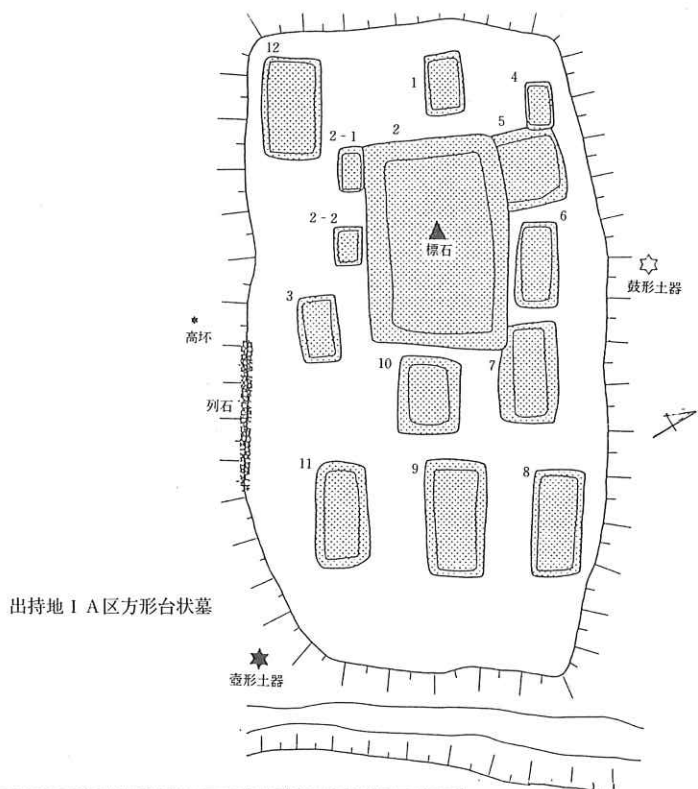
1、弥生時代中期(ことによれば前期)に丘陵上に、周りを完全な方形にめぐる溝で囲まれる方形周溝墓が造られる段階。

2、弥生時代中期後半、周りを円形にめぐる溝で囲まれる円形周溝墓が造られる段階。

3、後期には、完全には方形にめぐらない(とぎれる)溝で囲まれた墓が造られる段階。

4、一本、ないし二本の溝を尾根に原則として直交させて区画するて

図28 出持地方形台状墓遺構配置図 (表14参照)



0 5 m

写20 出持地遺跡の方形台状墓全景

表14 出持地墳墓群1A区土壙墓一覽表(図28参照)

主体部番号	墓 壙 (m)				棺 (m)				
	長軸	中央	東	西	長軸	中央	東	西	
1A-1	1.65	0.99	1.00	0.98	1.02	0.42	0.37	0.37	• 鈿 • 管玉1
1A-2 1段目	5.12	3.50	3.20	3.00	3.13	0.77	0.68	0.65	• 棺上一鼓形器台 • 標石・鈿
1A-2 2段目	4.05	2.00	1.90	1.88					
1A-2 -1	1.05	0.55	0.58	0.65	0.77	0.33	0.37	0.38	
1A-2 残存長-2	0.70	1.25	南 1.04	北 1.12	0.86	0.78	南 0.81	北 0.78	
1A-3	1.74	0.88	0.83	0.81	1.25	0.43	0.48	0.50	
1A-4 残存長	1.40	0.45	0.52	0.53	0.98	0.27	0.32	0.35	
1A-5 残存長	1.75	1.70	南 1.80	北 1.50	1.40	0.83	南 0.80	北 0.85	• 鉄鏃4・鉄劍1 • 鈿1
1A-6	2.24	1.10	0.95	0.95	1.53	0.40	0.25	0.41	
1A-7	2.58	1.45	1.45	1.07	1.90	0.48	0.43	0.45	• 棺上一鼓形器台 • 鈿1
1A-8	2.60	1.20	1.24	1.17	2.10	0.47	0.48	0.60	
1A-9	2.90	2.46	1.48	1.29	2.55	0.76	0.70	0.91	• 鈿
1A-10	1.95	1.70	1.50	1.55	1.10	0.59	0.49	0.51	• 鈿 • 碧玉製管玉37
1A-11	2.65	1.30	1.19	1.16	1.64	0.45	0.32	0.36	
1A-12	2.30	1.35	1.35	1.40	1.59	0.56	0.53	0.51	

野川の形成した沖積平野の基部に当たり、眺望はもつともよい。

1A区は尾根の北西端に近く、長方形に削平されていたので戦時中はイモ畑として耕作され、その耕作によつて墓上祭祀の土器が破砕され消滅していたのであるが、この削平地が、長軸を北西から南東方向に向け、尾根を削り出して造られた一六×九メートルの方形台状墓であつた。

周囲に、こぶし大から人頭大の列石も残り、一四基の土壙墓が検出された。台状墓の基部には、墓域を画する幅二メートル、深さ一メートルの溝を掘っていた。この、溝の南側からは、内傾した口縁部をもち、頸部から胴部にかけて円形竹管文様を施した壺形土器が、破砕された状態で出土した。

中心墓壙1A2主体部は、長さ五・一二メートル、幅三・五メートル、深さ二メートルを超え、棺上からは、人頭大の標石と、棺上祭祀に使用したとみられる

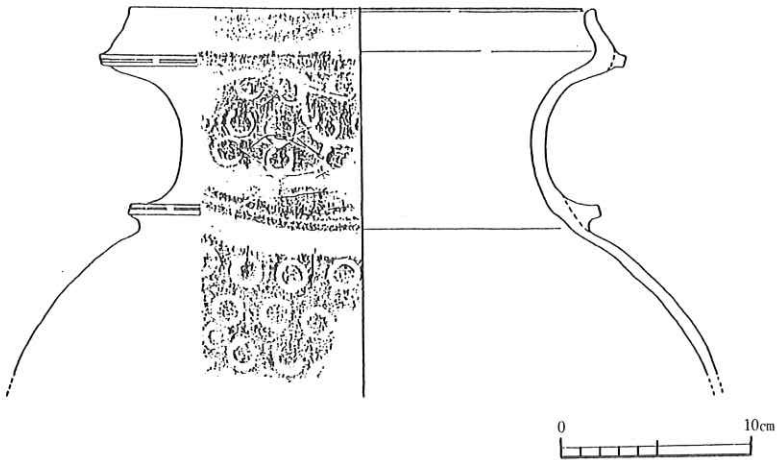


図29 出持地方方形台状墓出土の壺形土器

鼓形器台・高杯などが出土し、墓壙底からは鉦一点が検出された。1A10主体部の墓壙内からは碧玉製管玉三七点と鉦が検出された。碧玉製管玉は1A1主体部でも一点検出されており、主軸が直交する1A5主体部からは、鉄剣一・鉄鏃四・鉦一などかなりの鉄器が検出されている。

1C区からは三主体をもつ周溝墓らしい遺構が検出されている。また、東方山麓の8地区からは、3地区にある前方後円墳（推定）に向かう墓道の一部が検出された。

この台状墓を含めて出持地遺跡は三世紀から四世紀、つまり、弥生時代終末から古墳時代へかけての、地域首長一族の墳墓群とみられる。

(3) 但馬の前期古墳

四世紀には、近畿中央部を中心に、大きな前方後円墳などが出現し、埋葬施設は長くて大きい竪穴式石室をもち、鏡などの副葬品も豊富であるが、但馬では、この時代の前方後円墳はなく、埋葬施設も竪穴式石室になっていないが、例外として、山東町の柿坪の中山古墳は竪穴式石室をもち、正始元年銘のある鏡で有名な豊岡市の森尾古墳は、独立した墳丘上に三基の竪穴式石室をもっていたという。和田山町の城の山古墳は、四世紀後半に造られたと考えられているが、六面の鏡以外にも琴柱形石製品・石製合子などが出土している。

しかし、但馬のこの時期には弥生時代から引続いた集団墓がほとんどであり、低い尾根の稜線を、方形台状に削り出したものや、溝を掘りこむことによって四角を意識した墓が造られている。埋葬主体は木棺墓である。昭和六十二年（一九八七）に八鹿町の源氏山では、墓域を区画する溝もなく、方形も意識せず、尾根筋を削平した集団墓（二墳丘多埋葬）が多く検出され、木棺墓・石棺墓・土器棺墓など合わせて四〇主体余りも発見

された。竹野町では、同五十年（一九七五）に調査された阿金谷古墳群がこれである。

阿金谷古墳群

昭和五十年（一九七五）に採土工事中に発見された阿金谷古墳群は、出持地遺跡と並んで、竹野川へ向けて突出する舌状尾根上に立地し、標高は二五メートルを測る。

遺構は、尾根上を削り、溝によって区画した方形台状墓で、土採りによってかなり破壊されていたため、主体部は1号墳で一主体、3号墳で三主体、4号墳で痕跡一主体があり、主体部は尾根の稜線に平行もしくは直交し、垂直に近い角度で掘り込まれており、段を有するものはなかった。遺物は、3号墳第1主体部の鉋と、調査前の4号墳の採集品鉄剣二点だけである。土器は主体部上面と溝内から出土したもので、これらの土器から推定して、古墳時代前期前半～前期後半にかけて営まれた墳墓である。

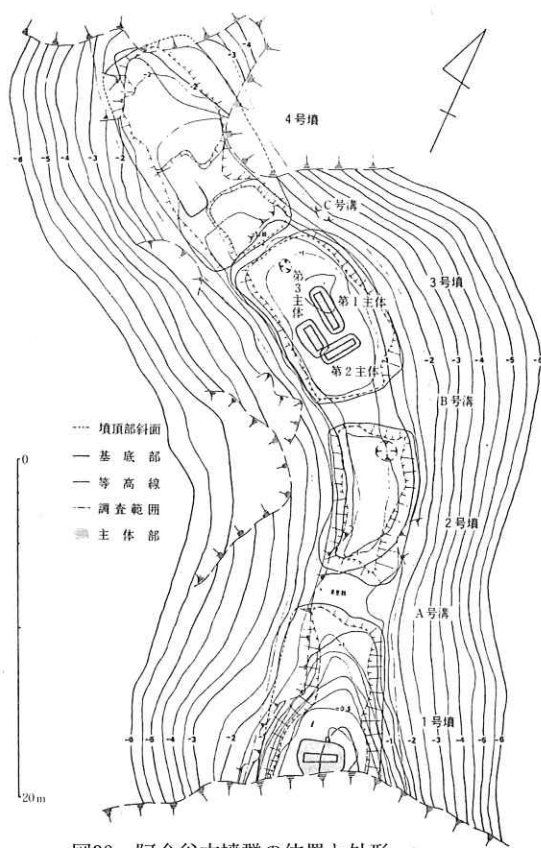


図30 阿金谷古墳群の位置と外形
（『但馬阿金谷古墳群の調査』より）

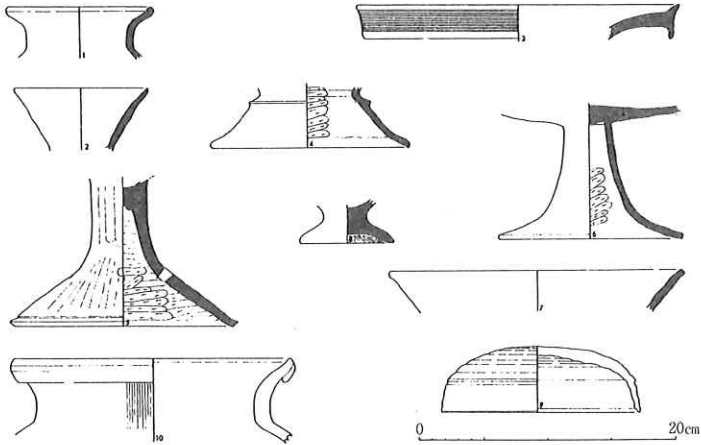


図31 阿金谷古墳群出土の土器（『但馬阿金谷古墳群の調査』より）

表15 阿金谷古墳群一覽表

(単位m)

項目 古墳名		墳 丘			主 体 部						棺 門 出 土 遺 物	
					基 拡			木 棺				方 位
		長辺	短辺	高さ	長	幅	深	長	幅	高		
1 号 墳	10.0	7.5	1.5	2.80	2.00	0.35	1.90	0.60	0.25	N56°E		
2 号 墳	9.0	5.0	0.4	流 失								
3 号 墳	第1主体			2.90	0.91	0.34	2.30	0.44	0.18	N63°W	鏡	
	第2主体	10.0	6.5	0.75	2.44	1.02	0.41	1.96	0.50	0.17	N23°E	
	第3主体				2.35	1.35	0.65	1.72	0.55	0.25	N64°W	
4 号 墳	13.?	7.0	0.5	1.2?	1.45	0.15?				墓拡 N55°W	鉄剣2?	

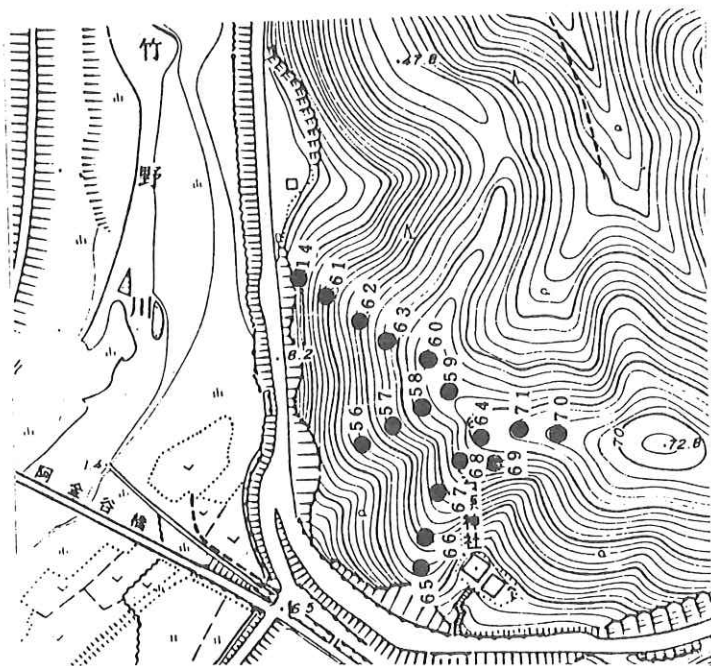


図32 阿金谷の山崎・谷口古墳群

(4) 大型古墳の出現

中期には、中央でも応神陵や、仁徳陵など最大級の前方後円墳が造られた。これらは、鉄製の武具・農具を掌握し、これを背景に、耕地の拡大をはかり、大きな経済力をもったからであろう。

但馬でも中期になると大きな古墳が造られている。和田山町の池田古墳は墳丘の全長一・二八メートル、周濠を含めると一七二メートルにも達する。同じく和田山町の長塚古墳、朝来町の船宮古墳、円墳では出石町の茶臼山古墳は直径四〇メートルもあり、和田山町の胃塚古墳も四〇メートルくらいある。また、出石町にある長持型石棺の部分石二点は、大和朝廷の大王クラスの古墳にあるべき石棺で、この石棺を葬った大古墳が出石町内にあったのである。

ところが、但馬ではこの時期に低い丘陵の稜線上に、直径三メートル〜二〇メートルの小円墳が墳丘の裾を接するように二〇基から三〇基、なかには一〇〇基以上も並んでいることがある。これは、豊岡市・竹野町・城崎町・日高町・出石町・山東町・和田山町などでみられる現象である。全国的には、次の後期になって横穴式石室の円墳が造られるようになると、古墳の数は爆発的に増加しているのであるが、但馬では、かえって、中期のこのような小円墳の数の方が多いようである。

これらの小円墳は、木棺、もしくは、少数ながら石棺で直葬したものが多く、横穴式石室とちがい一人だけの墓である。このことは、それまで古墳を造ることができなかった人々の一部の層が墓造りで見ずからの存在を示すようになったという、被支配層の成長を物語っているであろう。

竹野町で、中期の群集墳とみられるものは、阿金谷の神社付近に四〇基以上、小丸の裏山に二〇基、松本周辺に二〇基、須谷周辺に二〇基余りがみられる。

竹野町の ところで、自然の地形を利用しているものの、墳丘底部の直径が三〇メートルを超す大円墳
大型古墳 が竹野町に数基ある。発掘されていないので堅穴式石室があるかいは不明であるが、次のような大型円墳がある。

下塚・小山古墳 直径四〇メートル近くあり、高さも八メートルくらいで、墳頂が直径一〇メートルほど削平され、ここに神社がまつられていた形跡があり、石灯籠の破片なども散乱しているが、墳丘表面に厚さ一〇センチメートルほどの川砂利が葺いてある。

桑野本・稲蔵古墳 神社の境内にあり、墳丘上に摂社の祠が建っており、頂上付近の人為的に盛った土の直径



写21 下塚の小山古墳

は一四メートルであるが、基底部の丘の直径は三五メートルもある。和田・太田七号古墳 付近一帯の尾根の稜線上に一七基の古墳を確認したが七号墳は、山側に深い溝を掘り、高さは山側からでも三メートルはある。基底部は三五メートル以上ある。しかし、墳頂が直径二〇メートル削平されているので台状墓の可能性もある。他に太田古墳のうち二号墳・六号墳も二〇メートルを超す大型古墳である。

中期からの小円墳は六世紀の中ごろまで造り続けられるが、やがて横穴式石室が登場してくる。

(5) 横穴式石室古墳の登場

横穴式石室の葬法は、朝鮮半島からもたらされたもので、遺骸をおさめる玄室^{げんしつ}と、その一方の側に運び入れるための通路、つまり羨道^{せんどう}を連結させた石積の石室で、横の方向に羨門^{せんもん}が開くところから横穴式石室と呼んでいる。五世紀の後半には中央部で前方後円墳の後円部の埋葬施設として使用され、追葬によって墓造りの手間と費用が要らないので地方へ普及し、六世紀後半から七世紀前半へかけて、全国的に横穴式石室もつ直径一五メートル以内の円墳が群をなすほど造られた。

昭和三十年（一九五五）ころまで、古墳といえ、この横穴式石室古墳を指していた。また、横に羨道が開口しているため多くの古墳が盗掘されている。はじめは、板石を積んで石室を造り、持ち送りに天井部の幅を

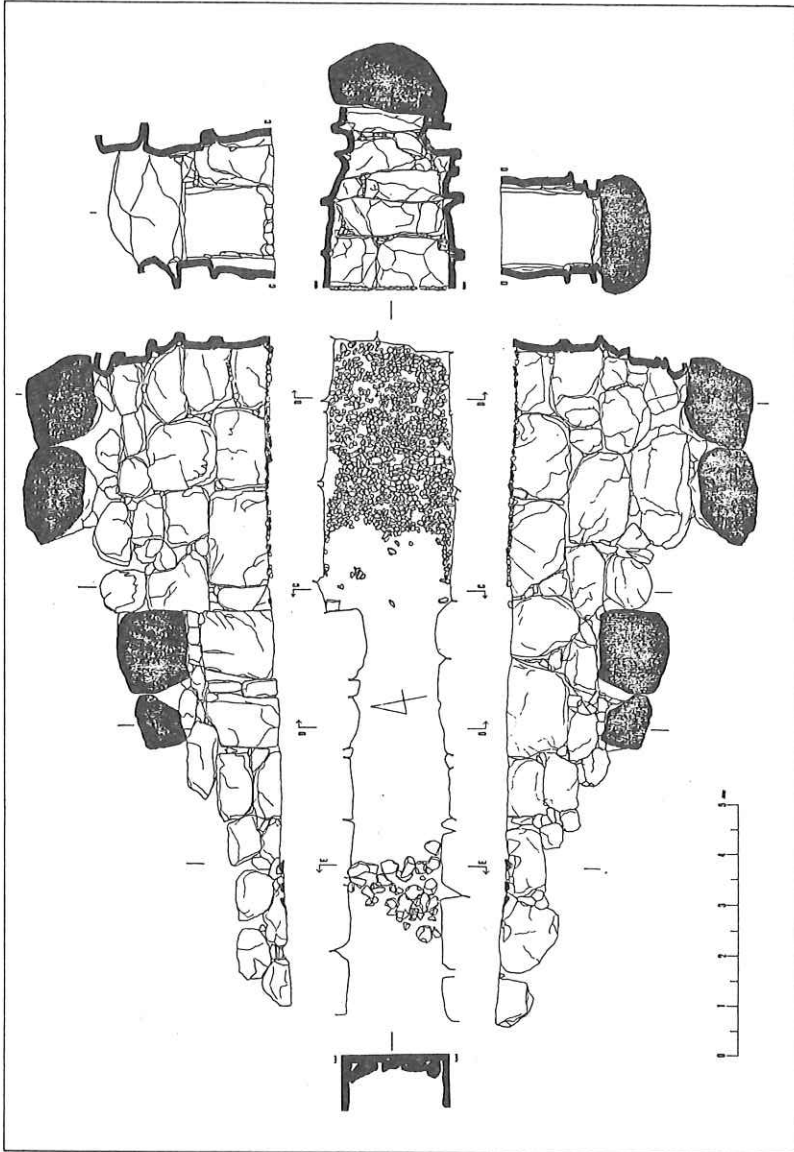
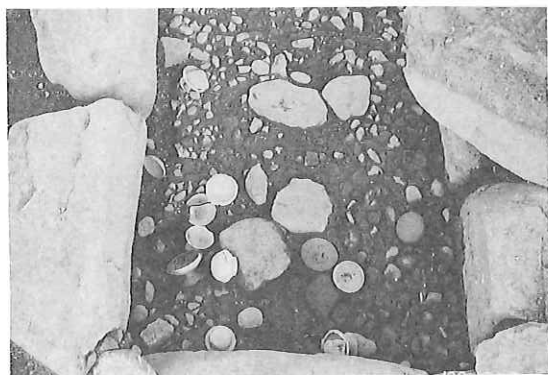


図33 日高町の楯縫古墳の石室図 (『原始古代の但馬』より)



写22 草飼の寺谷古墳の巨石



写23 美方町の水間4号墳の玄室床面

せばめ、蓋石も小さくてすんでいたが、次第に巨石を使用するようになり、奈良県の石舞台古墳の天井石は一個七七トンに達するという。但馬でも、養父町の大藪古墳群の石材は巨大である。竹野町でも、草飼の西山麓、集団墓地の先端にあった横穴式石室が破壊され、その石材が露出しているが、大きなものは二・五メートル×一・二メートル×〇・九メートルもある。

石室の形は羨道部から玄室部へ移るところで両側にひろがるものを両袖、片方へひろがるものを片袖、直線的なものを袖なし、中央部の広いものを胴張りどうばという。羨道部の入口には閉塞石へいそくせきという石で通路を塞いでいる。玄室内には敷石を敷き、平たい棺台石を置いている場合が多い。棺は多く木棺で、有力者の場合石棺や陶棺が用いられている。副葬品は身につけた装身具や、鉄製の武器・馬具・農具と、土器がある。土器は死後の世界での飲食物を供え

たものである。竹野町では、横穴式石室をもつ古墳は田久日坊主ヶ平なるのヨゴレババ古墳以外あまり知られていなかったが、今度の調査で群集墳も合わせて数十基も存在することがわかった。

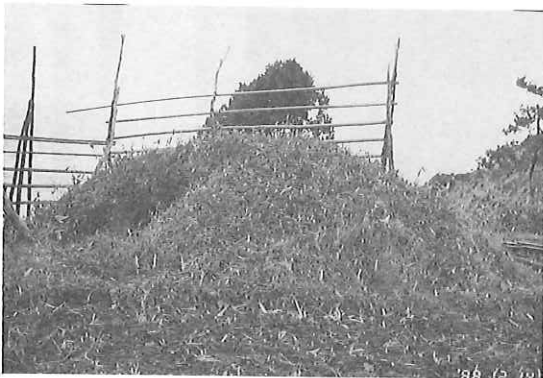
田久日・
ヨゴレババ古墳

豊岡市との境界に近い海岸の水田横に、二基の横穴式石室をもつ円墳があり、石室は乱掘されながらも残っている。この二基が、竹野町で石室の構造がみられる唯一の遺跡である。

一号墳は、直径一二メートル、高さ三メートルの円墳で、石室（玄室）の長さ四・一メートル、幅一・九メ



写24 田久日のヨゴレババ1号墳石室内部



写25 ヨゴレババ2号墳の墳丘

ートル、高さ一・三〜一・五メートル、玄室部の天井石は五枚を使用し、羨道部も二メートル余り土に埋まっている。二号墳も、同じ規模の円墳であるが、墳丘の三分の一と羨道部全部と玄室の一部が削り取られている。石室の残存部は、長さ二・六メートル、幅二メートル、高さ一・二〜一・五メートルである。石室の奥壁の上部左右に三角隅持えんかくまも

ち送りという板石を使用している。この工法は、韓国の古墳に多い技法で、朝鮮半島からの渡来人の墓を推測させるものである。

草飼・寺谷古墳群・草飼の集団墓の尾根は六基の古墳であり、北西の竹藪の中に側壁の残ったもの二基、尾根の上に巨石の露出したもの他一基、計十基以上が群集している。

松本・後期古墳群・石室の一部や、石材の露出したものなど二三基を確認した。松本入谷の山麓にある荒れ畑と杉林の中に十基余りの横穴式石室の痕跡を確認した。

宇日・大正二年（一九一三）に宇日の長岡治作ほか数名が山林を開墾中畑の中から杯身一点を採集した。附近を調査したところ、数基の横穴式石室を有した古墳を発見した。

田久日・昭和三十六年（一九六二）の有料道路建設の際に路面の下に二基の古墳を発見し、須恵器の小破片が公民館に保管されている。

西町・南アンジャ古墳・西町アンジャの古墳二、三基を、昭和四十七年（一九七二）の道路工事で破壊したときの出土品が町民会館に保管されている。須恵器の平瓶・甕・杯身などである。

西町・南アンジャ古墳・西町アンジャの古墳二、三基を、昭和四十七年（一九七二）の道路工事で破壊したときの出土品が町民会館に保管されている。須恵器の平瓶・甕・杯身などである。



写26 宇日の横穴式石室古墳

破壊されたものもある。

(6) 阿金谷の横穴墓

横穴墓(よこあな)は、古墳時代後期の六〜七世紀に、山の斜面に横穴を掘りこんで埋葬を行なったものである。山の地質が掘り易い風化花崗岩、砂岩・凝灰岩などの条件に合ったところは、全国的に横穴が存在する。近くでは、鳥根県や鳥取県にあり、但馬では北但に多く、豊岡市の妙楽寺・田和地・日撫正福寺谷・出石町坪井・福井などがある。とくに、正福寺谷横穴墓群では三〇基近くの横穴が発掘調査されたので、築造年代や性格、再利用などについてもかなり解明され



写27 南アンジャ古墳出土の魂

浜須井・大谷古墳 山裾の畑の端に横穴式石室が露出している。長さ五メートル、幅約三メートル、高さ一・五メートル、盗掘されているかもしれないが石室はよく残っている。

林・坂の谷 坂の谷を二キロメートル入った支谷の入口三カ所に直径六〜八メートルの古墳十基余りがあり、林道工事で

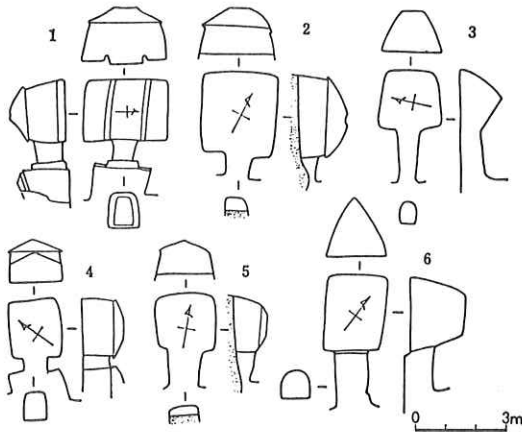


図34 山陰の横穴墓

四注式平入り横穴 (1鳥根・安部谷1号, 2鳥根・四茨-Ba 7号, 3鳥根・普段寺1号)
 四注式妻入り横穴 (4鳥根・竹の中3号, 5鳥根・磨ヶ谷1号, 6鳥根・小谷B1号)

第二節 竹野町の古墳時代

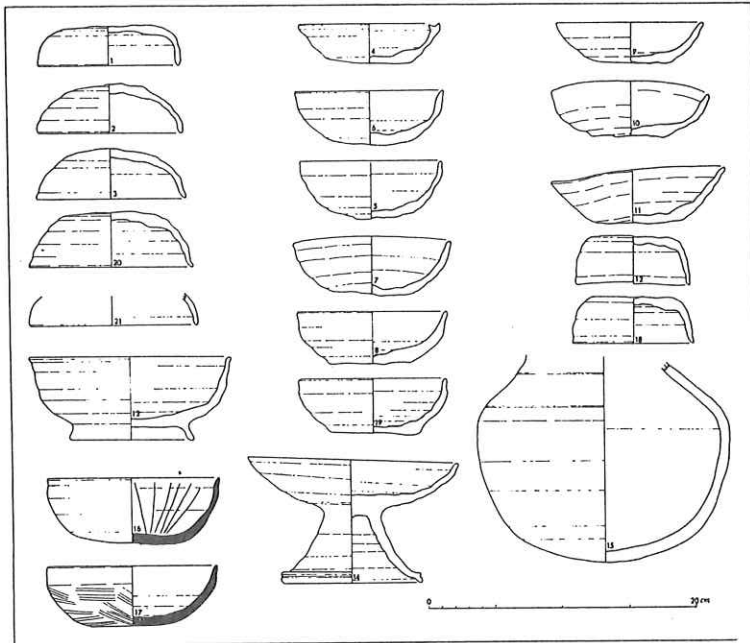


図35 阿金谷横穴群出土の遺物実測図（『但馬阿金谷古墳群の調査』より）

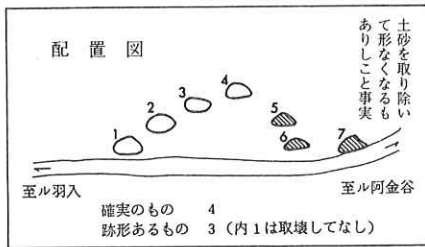


図36 阿金谷横穴群の配置
（『同上』より）

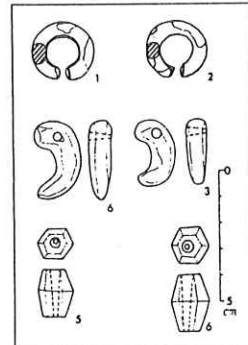


図37 阿金谷横穴群出土の
玉類実測図
（『同上』より）

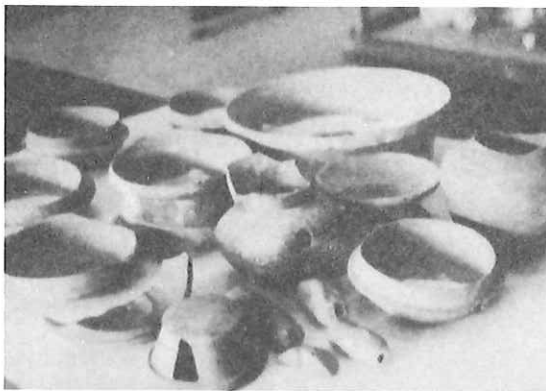
てきた。

阿金谷横穴墓は、全国でも早い時期に発見され、遺物が散逸せずに保管されているのは貴重である。明治三十五年（一九〇二）に子どもものいたずらから偶然発見され、七基が確認された。出土品からみて、七世紀前半ころのものとされる。昭和三十七年（一九六二）の道路工事その他によって、七基の横穴すべてが消滅したのは残念である。しかし、地質の状況からみて、町内には未発見の横穴が残っている可能性が高い。

第三節 竹野町の須恵器窯跡

鬼神谷窯跡は、昭和四十九年（一九七四）、
地主の立花邦彦氏が宅地造成中、土採り場から須恵

器・土師器が多量に発見され、古いものは五世紀末から六世紀初頭に、新しいものは七世紀代に位置づけられた。竹野町教育委員会は、京都大学考古学研究室に依頼して、同六十三年（一九八八）から平成元年（一九八九）にかけて学術調査を行なっている。詳しい報告書は出されていないが、この調査によって発見された窯跡は三基あり、一号窯跡は五世紀末～六世紀初頭、二号窯は七世紀前葉、三号窯は七世紀中葉に位置づけられ、尾根の先端から順次に基部へ向って築かれており、かなり長期にわたって須恵器の生産が行なわれたこと



写28 鬼神谷窯跡出土の須恵器



写29 鬼神谷1号窯跡

が確認された。また、西北の沢地さわで、煮炊きに使う土師器甕、食用用に用いる須恵器杯・高杯などのほかに土錘（網につけるおもり）・ガラス玉（装身具の一部）などとともに粘土をためた穴が見つかり、六世紀はじめの工房跡であることがわかった。鬼神谷のほかにも、鬼神谷ホーキに長さ一二メートルの窯跡があったが、水道工事で消滅し、切浜にあったという窯跡も道路工事で消滅したようである。しかし、須の字のつく字名の多い竹野町は、新しく窯跡の発見される可能性も高いし、但馬各地で出土する須恵器を調べることによって、鬼神谷窯の商圏なども明確になってくるであろう。

第四節 歴史時代の遺物散布地

竹野町の各集落周辺や、圃場整備後の水田などから、奈良・平安時代の土師器・須恵器片や、中世の陶磁器片などを多数採集した。すでに、この時代から、現在の集落の祖形が形成されていたことがわかる。今後、これらの資料を蓄積することによって、文献資料の裏付けがなされるものともう。

表16 竹野町内土器散布地一覧表 (平成元年1月現在)

遺跡名	所在地	立地	備考
ミヨズ遺跡	田久日字大ガリュウ	畑地	古墳はないが畑に土師器須恵器散布
妙見谷	草創字妙見谷	畑	段々畑で須恵器1点
中村遺跡	字中村	山裾畑	須恵器3点
御堂谷	字御堂谷	畑	土師器2点
三味ヶ岡	林字三味ヶ岡	畑	土師器 須恵器多数
苗原	森本字苗原	山林	須恵器片
クマヤマ	切浜字クマヤマ	畑	須恵器、土師器
見取	浜須井字見取	山裾	土師器7点
見蔵岡	松本字見蔵岡	山裾丘陵	須恵器10点余り土師器も
小森岡	松本字小森岡	山裾宅地	土師器、須恵器、中世陶器多数
土生谷	松本土土生谷	山裾畑	土師器、須恵器
江川	竹野字江川	山裾畑	土師器 須恵器多数
太田	和田字太田	畑	土師器 須恵器片多数
竹ビ	字竹ビ	水田	須恵器片10点
小谷	須谷字小谷	谷よりの畑	須恵器10点
境内	字境内	平坦地	須恵器、土師器
西谷	字西谷	屋根先端の下	須恵器、土師器各1点
井山	字井山	宅地	須恵器1点
森脇	善字森脇	山の中腹	須恵器1点(古墳出土品)
谷	坊岡字谷	畑	須恵器1点
熊田	御又字熊田	山裾台地	土師器、須恵器片
角谷口	御又字角谷口	字	須恵器1点
門谷	門谷	字	字
須野谷	須野谷	谷の川原	字
稲蔵	桑野本字稲蔵	台状地	土師器数点
竿田	字竿田	扇状地	土師器 須恵器 各1点
谷田	小城字谷田	山裾台地	土師器4点 須恵器1点
中村	根字中村	谷ノ口	土師器20点 須恵器20点
羽入	羽入	水田	圃場整備工事中、数百点

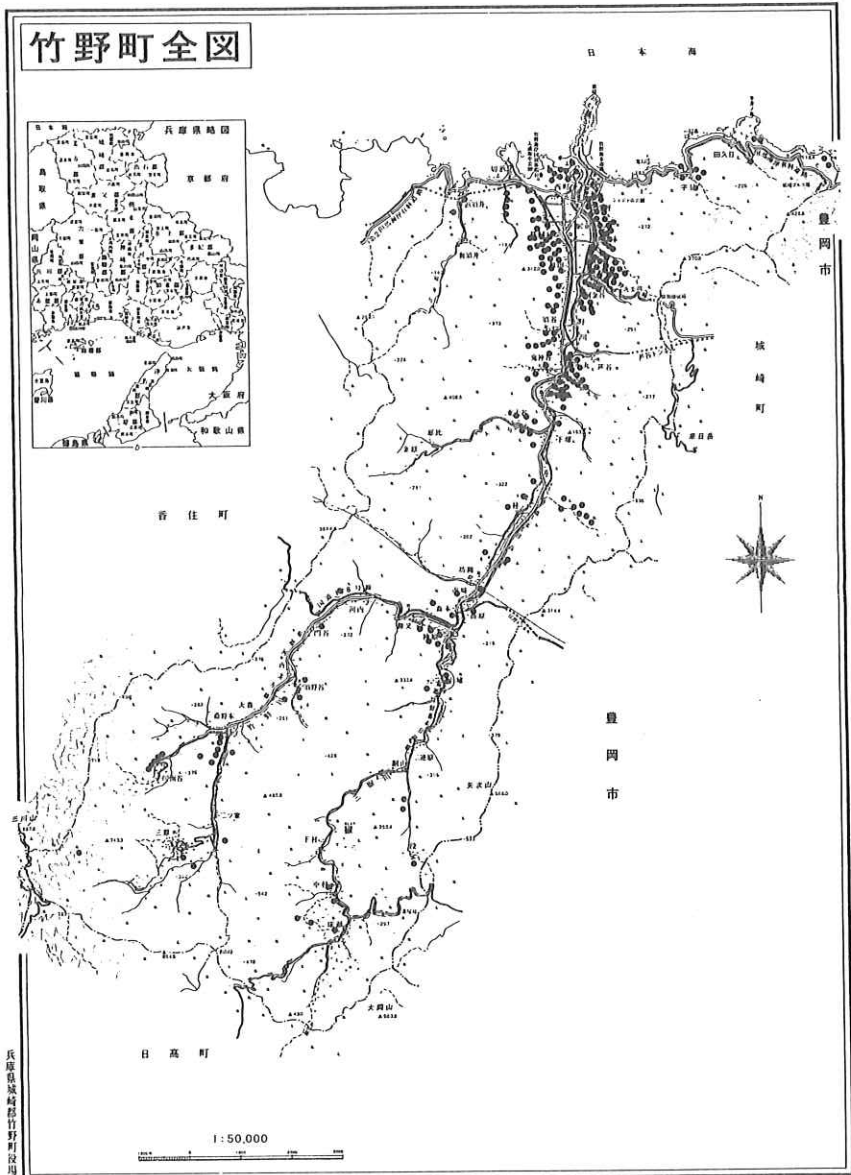


図38 竹野町遺跡分布地図（平成元年1月現在）

